

一・夜の彷徨い

昭和十五年、初冬。横浜―。

横浜元町のレストラン霧笛楼は、外国の客人をもてなすのに相応しい店だった。

その一番大きな部屋で、食事を伴う会合が盛大に行われていた。宴も酣だった。大きな笑い声が絶えなかった。

三国同盟の技術交流の一環として海洋戦術の研修に来ていたイタリア海軍の歴々も、それを迎えた日本側の関係者達も共にほどよく酔い、打ち解けた雰囲気になっていた。その最大の功労者は、この日の会合の為にイタリア大使館から派遣されてきていたカリーナ嬢だったのかもしれない。陽気で美しいその女性通訳が両国の出席者達の雰囲気を盛り上げ、円滑にしていたことは間違いなかった。

会合がうまく進行したことに彼女自身も喜んでいた。一生懸命に勉強し、習得した日本語が、大切な両国の会合に役立ったことにこの上ない満足感を覚えていた。両親の猛反対を押し切って、この極東の国へ来たことにも後悔はなかった。

だが、イタリア側の海軍大将に酒臭い口でその提案を耳打ちされた時に、彼女の気分はいっぺんに悪くなった。日本側の海軍大将が彼女をいたく気に入ったので、このまま「夜の相手」をしてやってくれないかという内容だった。気性の激しい普段の彼女なら、あるいはそのイタリアの大將に平手打ちを喰らわせていたかもしれない。だが、この日の彼女はその怒りをぐっと堪えて、何も返答せずに化粧室に立った。せっかく自分が盛り上げた会合のいいムードを壊したくなかったからだ。

化粧室の鏡の前で、彼女は声押し殺して泣いた。

自分が日本語を一生懸命に習得したのは、こんなことの為ではなかった。純粋に、大好きな日本とイタリアの架け橋になりたかったからだ。三国同盟の締結に伴う職員補強の為にイタリアの在日大使館が募集した臨時職員に採用され、その夢が叶った。彼女は水を得た魚のように、両国の為に尽力してきた。その貢献度は、本国からも認めてもらえているとの彼女なりの自信もあった。だが、その結果がこの娼婦のような扱いだだった。

止まらぬ涙顔のまま、彼女はそこを逃げるように飛び出した。会合の部屋には戻らなかった。そのまま、店の外に出てしまった。年の瀬の空気が冷たかった。

その界限は、自分の大好きな日本の雰囲気とは少し違っていた。どちらかという、故郷のヨーロッパの街並みと似ていた。

石畳をあてもなく彷徨っていると、大きなネオンサインが灯る一軒のパブに吸い込まれるように入ってしまった。世界中のどこの港町にも必ず一軒はあるような大きな酒場だった。重いドアを開けると大音響でジャズの曲が流れ、タバコの煙が充満していた。その店の雰囲気もぎっしりと埋まった客層も多国籍だった。

カウンターに座りカクテルを注文すると、案の定、入れ替わり立ち替わりで男達が声を掛けてきた。国籍も様々だった。その都度、彼女はイタリア語と日本語を巧みに使い分け

て、彼らを追い払った。男達の下心には、もううんざりだった。

しばらく、そんな状態を繰り返していると、店の奥の方で歓声が上がった。

何故か妙に気になって行ってみると、ビリヤード台の周りに小さな人ばかりができていた。丁度、勝負の決着がついた所のようなだった。さっきの歓声は、その時のものだったのだろう。勝負と言っても、賭け試合だとわかった。台を囲んで見ていた数人が、金の受け渡しをしていたからだ。

どうやら、賭けに勝ったのは東洋人のようであった。負けたのは、どこか他の国の船員のようなだ。こういった賭け試合には慣れているようで、その東洋人の男は淡々と金を受け取り、短い英語で礼を言っている。

人の輪が散会した時、彼女が声を掛けた。

「日本の方かしら？」

目の前の西洋人から流暢な日本語で声を掛けられたことに、その男は少し驚いたようだった。

「そうですよ」

少しだけ間をおいて、男が答えた。

「ビリヤードがお上手なのね？」

「まあ、それなりには」

その日本人は、愛想笑いすら返してこなかった。

「ひよっとして、プロの方かしら？」

「さあ、どうかな」

言いながら、男はバーテンダーに向かって指を立てて何かを頼んだ。

バーテンダーは、わかったように首を縦に振って応えた。どうやら、そのやり取りだけで注文が分かり合える程の常連のようだ。やがて、バーテンダーがビールを運んでくる。

その男は、ビール瓶と引き換えにそのバーテンダーにいくらかの札を握らせた。ビール一本の代金にしては、札の枚数が多過ぎる。おそらく、賭けの場所代も含まれているのだろう。

「やっぱり、プロの方なのね？」

「まあ、そういうことになるかな」

「だったら、私と勝負をしてくださらない？」

カリーナの意外な申し入れに、男はビール瓶を口にくわえながらまじまじと彼女の顔を見た。黒髪的情熱的な顔立ちだった。多少酒は入っているようだが、その大きな瞳には生氣がみなぎっていた。

「申し訳ないが、俺は賭け以外ではやらないんでね。遊びだったら他を探してくれ」

男は、彼女から視線を外して言った。

「勿論、きちんとお支払いするわ。但し、私が負けた場合だけど」

子供の頃から、ビリヤードの名選手だった父親に仕込まれていた彼女は、かなりの自信を持っていた。イタリアでは、負け知らずだったのだ。

「ははは…。面白い挑発の仕方だね」

始めて男が、笑みを浮かべた。

彼女の挑発が、面白い冗談に聞こえたからだ。

「だが、今日はもう充分に稼いだんでね。またの機会にしてくれ」

そう言って、男が自分のキューを片付け始めた。

「普段は、いくらでやっているの？」

彼女は、なかなか諦めようとしなない。

「一本、50ドルつてところだ。まあ、火傷をしないうちにやめておくことだ」

「50…」

彼女は、絶句した。かなりの高額である。

「いいわ。それでやりましょう」

そう言ってしまったものの、実際彼女はそんな金額は持ち合わせていなかった。

それどころか、持ち金はせいぜいこの店の酒代に毛が生えた程度であった。だが、もはやいったんついてしまった闘争の炎を消すことはできなかった。

「やめておいた方がいい」

男は、帰り仕度の手を止めない。

「いいわ。じゃあ、その倍、100ドル出すわ」

いつものように勝てばいいのだ、と彼女は内心開き直った。

それに、小馬鹿にされているようで悔しかった。自分の実力をこの日本人の男に見せつけてやりたくなくなっていた。

それを聞いて、男の手が止まった。疲れてはいるものの、悪くない条件だった。小一時間、一日分の稼ぎができる。

「そこまで言うのなら、少しだけ相手をしてやろう」

男は了承した。

そして、一時間後―。

カリーナはプロと素人との差を思い知らされていた。

「完敗よ。…でも、ごめんなさい。実は、今はまったく持ち合わせがないの」

「なっ…」

男は、呆れてものが言えなかった。

例え勝負の相手が、やっかいなスジの者であったとしても、賭けたものは何が何でも払ってもらおう。それが、この道のプロとして生きる者の流儀であった。勿論、相手が女性であつてもだ。

だが、実は今回は自分にも非があつた。通常、初めて手合わせをする客には、あらかじめ相手の持参金を見せてもらうことにしていた。相手のほとんどが、初対面の船員や流れ者だからだ。その金額の中で賭けの内容を決めてきたのだ。だが、通常とは違う話しの流れからか、今回はそれを怠ってしまったのも事実であつた。

男は悩んだ。

カリーナの言葉が、更にそれに追い打ちをかける。

「実は、今夜泊るところもないの…」

彼女は、真剣な眼差しで続けた。

「だから、今夜はあなたの泊る所にご一緒するわ。…どこにでも連れて行って」

そう言われた男は、彼女の顔をじっと見た。どうやら、本気のようなのだ。だが、彼女がそういった商売の類の女でないことだけは、経験上見分けがついていた。

男が言った。

「君には、たった100ドルの価値しかないのかい？」

そう言われた彼女は、しばらくハツとしたように絶句していた。それから、覚悟を決めるように答えた。

「それは、あなたが決めることよ」

しばらく二人は見合つたまま、沈黙が続いた。

「本当に、今夜の宿代もないのか？」

「ええ。行きがかり上、送ってもらう相手を置いてきてしまったの……」

男は、更に悩んだ。そして、キューを治めた小さなカバンを手にすると、ひと言だけ言った。

「ついて来い」

店を出た男を、カーリーナが小走りに追った。

男は、黙って関内方面に向かって歩いていく。

「私は、カーリーナ・ロッシーニ。イタリア人よ」

白い息を切らせながら、彼女が名乗った。

「近衛慎作だ」

男は、前を向いたまま答えた。

二・至福の地

慎作とカーリーナは、黙々と夜の横浜の街を歩いた。

互いに名乗り合つた以外、二人は会話を交わさなかった。

関内を過ぎたあたりで、慎作は海とは逆の方角へ向かつて行った。あたりはどんどん通りがなくなっていく。カーリーナは不思議に思った。繁華街からは完全に離れてしまい、住宅街に入っていたからだ。この先に宿泊施設などはありません。だが、不思議と不安感はなかった。むしろ、黙々と前を行く慎作の背中に、安心感のようなものさえ感じている。

しばらく、ゆるやかな坂道を上ると、慎作は一軒の家の前で足を止めた。

ごくありふれた典型的な日本の一軒家であった。慎作が玄関の引き戸を開けると、その音を聞きつけて奥から一人の三十歳台ほどの女性が出迎えた。

「おかえり……」

そう言った彼女は、当然のように、弟の連れの見慣れぬ外国人女性に驚く。

「姉さん、客人のロッシーニさんだ。急ですまんが、今夜はここに泊らせてもらう」

「あら……、そうなの……」

と、一瞬とまどつたものの、姉はすぐに普段の気さくな笑顔に戻った。

「慎作の姉の菊枝です。さあ、どうぞ。狭いところですが、あがつてくださいいな」

「本当に、突然で申し訳ありません。カーリーナ・ロッシーニと申します。ひよんなことから、慎作さんに宿の世話をお願いすることになりました。宜しくお願いします」

「まあ。外国の方なのに、随分と日本語がお上手なのね？」

二人の脱いだ靴を揃えながら、菊枝が驚いて言った。

「はい。イタリア大使館で、通訳をやっておりますので」

「まあ、そうなんですか。それで、そんなに…」

「納得する菊枝に対して、慎作は「本当なのか」という顔をして彼女の方を見た。彼は内心、想像以上にきちんとしたカリーナの身上に驚いていた。その驚きは、カリーナにも伝わったらしく、彼女は「本当なのよ」という笑顔で頷いて見せた。

しばらくの後、カリーナは慎作の部屋を提供され、床に就いた。

慎作は菊枝の部屋で寝ていた。布団に入ったカリーナはなかなか寝付けなかった。

和室に布団敷きという、普段と違う環境だからというわけではない。霧笛楼の会合で受けた仕打ちに、悔しくて仕方がなかったからというわけでもない。

その逆だった。嬉しくて仕方がなかったからだ。言いようのない幸福感に包まれていたからだ。それで、気持が高揚してしまっていたのだ。

近衛慎作という男は、彼女の男性観を一変させた。

カリーナは、男を惹きつけてやまない魅力的な容姿を持っていた。成人してからは、ことあるごとに男達に言い寄られてきた。それは、仕方のないことだと自分自身もある程度は割り切っていた。飛び込んださっきのPubでもそうだった。それも、環境的に仕方のないことだったろう。だが、本来そうあつては欲しくない日本の海軍大將達ですらそうだったのが悲しかった。ヨーロッパ人は、遠い極東の異国の地に、ある種の神秘的な憧れと尊敬の念を持っている。わびさびの文化と侍の精神にである。カリーナも、そう思う一人だった。

アジア圏で始めて開催が決まった東京でのオリンピックも、柔道の創始者である加納治五郎がヨーロッパを訪れたことが大きく寄与していた。IOCの委員達は皆、厚い尊敬の念を抱いて彼に接した。それだけに、レストランの会合での日本の軍人の振る舞いは彼女を失望させた。

そして、いい加減にうんざりしていた時に出会ったのが、慎作だった。

彼は寡黙だった。だが、言うべき事はきちんと言ってきた。自暴自棄になって、自分を安売りしようとした時、彼は「君には、たった100ドルの価値しかないのか？」と、言ってくれた。そして、その言葉通り自分を大切に扱ってくれた。

彼こそが、「侍」だった。

やがて、眠りに入ったカリーナは、久しぶりに熟睡した。

目覚めた朝、不思議なくらいに気持ち晴れ晴れとしていた。昨日レストランであったあの忌まわしい出来事も、どうでもよくなっていた。菊枝が振る舞う朝食も申し分がなかった。おそらく、慎作達にとっては普段と変わらない朝の風景なのだろうが、彼女はこれがこの上ない幸せに感じられた。まるで、イタリアの自分の家にいるような安らぎを覚えた。

その日からカリーナは、大好きな日本での生活を身をもって満喫することになった。週末や休みの日のほとんどは、横浜の慎作の家で過ごすようになった。

イタリア北東部―。

その銃工房は、ロンバルディア県・ブレシアの郊外にあった。

ひと気のないその工房でたったひとり、田代幸吉はこの日も黙々と自らに与えた課題に取り組んでいた。それは、彼が苦手としている木材の加工だった。銃床に当たる部分の加工である。万力で作業台の上に固定してある銃床の形に切つてある木材を、一心不乱に削っていた。

はるばる日本からこの地に来てから半年が経とうとしていた。

文字通り激変した環境の中で、始めのうちは当然のように言葉や文化の違いに戸惑っていた。だが、幸吉は思っていたよりも早くそういった環境に順応することができていた。生活面での違いはともかく、仕事面においては、あまり日本にいた時と変りがなかったからである。日常の大半を過ごす肝心の銃造りにおいて、想像していたほど大きな違いがなかったからだ。

使用する材料やそれを加工する工具も、自分が日本で使っていた物とほとんど変わりがなく、銃を造っていく手順や方法においても、自分が日本でやっていたこととさほど変わりがなかった。世界一と謳われるイタリアの銃造りに大いなる期待を持って臨んだ幸吉にとっては、やや期待外れの感があった。金属部の削り出しや研磨の腕前は、工房の中の現地の職工達と比べても、むしろ自分の方が優れていると感ずるくらいであった。

だが、最近それが大きな間違いであった事に気がつき始めていた。確かに、表面的にはあまり変わりが無いのだが、本質的にはまるで違っていたのだ。それは、イタリア職人達の飽くなき「こだわり」であった。

彼らは、機関部や銃身の細かい金属部品の一つ一つに、最善のこだわりと細心の注意を払うのである。それは、小さなネジの一本にさえ及んでいた。日本ではそこまではこだわっていないかった。だが、どんなに些細で小さな部品であっても、その一つ一つには、各々の目的があるのだ。そうした場合と、そうしていないものとの差は、人間の感覚においてほとんどないのかもしれない。しかし、それがいくつも重なって最終的に完成品になった時に、そうしなかったものとの差が「僅か」に表れてくる。そして、銃の世界においては、その「僅か」な差が「決定的」な差になってくるのである。

そのことに気づいてからの幸吉は、今日のように休みの日も工房に来るようになったのだ。何百年の歴史に裏打ちされたイタリアの技術を、たった数ヶ月か数年で習得できると思えない。だが、居ても立ってももいられなくなったのだ。

「やっぱり、ここに居たか」

工房の入口の方から声が聞こえた。

「探したぞ、幸吉」

同じ職工仲間のシーザー・カブリーニだった。

五歳年上の彼は、この工房の中に居る十人以上の職工の中では一番若く、そして腕がたった。年が近いこともあって、二人はすぐに仲良くなった。社交家の彼は、東洋人の幸吉にも分け隔てなく接してくれた。半年間でイタリア語が上達したのも、シーザーのおかげと云ってよかった。

「なんだ、シーザーさんか…。休みの日に、どうしたんですか？」

「どうしたはないだろう。わざわざここまで、君を探しに来たんだぞ」

「えっ、僕を？」

「うん、そうだよ」

言いながら、彼が幸吉の作業を覗き込んだ。

「ほほう…、木材と格闘しているわけだな。うん。感心、感心…」
にやにやしなながら、彼が言う。

「僕を探しにわざわざここまで来たって…、何か急な用ですか？」

幸吉が、作業の手を止めて訊いた。

「ふふふ…。君も、なかなか、そのエプロン姿が似合ってきたな」

幸吉のその作業着姿をまじまじと見て、シーザーが笑った。

「な、なんですか、シーザーさん。そんなことを言う為に、わざわざここに来たわけじゃないんでしょう？」

幸吉は照れながら言った。

イタリアの職工にとつてはあたりまえに作業用に着るものだが、始めてそれを見た幸吉は、それが女性が家内作業の時に着るのと同じように見えて恥ずかしかった。だが、今ではそれをイタリア人のシーザーから似合っていると言われたことが誇らしく、嬉しかった。クラフトマンとして見てもらえたからである。

「ははは…、そうだった。すまなかった。だが、君のその姿が堂に入ってきたということ传达了かったんだ。つまり、褒めようとしたんだ」

「ははは…。それはわかっていますよ。…で、本当は何の用ですか？」

「うん。ここのところ、君は随分と根を詰めているように見えたから、気分転換にドライブに誘おうと思ったんだ。現に、休みの今日もこうやって工房に出て来ているし…」

「そうですか、ありがとうございます。でも、僕は…」

「ほらほら、そんなことを言わずに黙って僕に付き合えよ。休むべき時は休まなくちやダメだよ」

そう言つて、シーザーが幸吉から研磨用の工具を取り上げた。

「日本人がとても勤勉なのはよくわかるが、ここはイタリアなんだからな。少しは、この国のやり方に従ってもらおうぞ」

「ははは…。わかりましたよ、シーザーさん」

幸吉は、観念して従うことにした。

内心、この明るい友人の申し入れが嬉しかったのも事実であった。

二人は工房の前に停めてある小型のトラックに乗り込んだ。

トラックは、意外にも南の方向に向かった。

「どこへドライブに行くんですか？ 気分転換だというからてっきり北の山岳部に向かうと思っただけ…」

ブレシアの北の裏手は山岳地帯になり、それはアルプス山系へと続いていた。幸吉は、以前工房の先輩達にそこへ連れて行ってもらったことがあった。そこには大小の湖が点在し、まるで絵葉書のような美しい景色を造りだしていた。気分転換だとすれば、てっきりその辺りだと思い込んでいたのだ。

「ははは…。クレモナに向かっている」

「クレモナ：？」

「うん。車ならここから一時間くらいで行ける隣町だよ。そこに、君に見せたいものがあるんだ」

「へー、何を見せてくれるんですか？」

「実は、そこへ行って、イタリアの銃の秘密を教えてくださいようと思っている」

「本当ですか？ 一体、何を：？」

「ははは：。それは着いてのお楽しみだ」

シーザーは、勿体ぶるように笑って言った。

やがて、トラックはクレモナの街中に入ってしまった。大聖堂（ドゥオーモ）の大きな鐘の音が、それを証明していた。

幸吉は、車の窓越しにその景色を見ていた。街の造りの雰囲気はブレシアのそれとそっくりであった。だが、ひとつだけ相違点に気づいた。外灯の柱など、街の至る所にバイオリンをモチーフにしたオブジェや飾りが施されていた。音楽・楽器とは直接関係のない商店のショーウィンドウの中にさえもバイオリンが飾られているのだ。

「さつきから見ていると、やけにバイオリンの飾りが目につくんですけど：？」

「ははは：、気がついたか。実は、クレモナはバイオリン造りの街なんだ」

「なるほど。それで、街のいたる所に：」

「うん。バイオリン造りの聖地と言っているところだ。まあ、ブレシアの銃のバイオリン版だと思えばいい。街中にイタリアを、というよりも世界を代表するバイオリンの工房があるんだ」

「そうなんですか：」

この地方は、古くは十六世紀のアマーティ家に始まり、ストラディヴァリやガアルネリなどの世界的な名匠を輩出したバイオリン造りの歴史そのものであり、一九四〇年の今も、多くのバイオリン造りの工房がひしめき合っていた。

二人を乗せたトラックは、そのうちの一軒の工房の前で停まった。

「ついてこいよ、幸吉」

シーザーは車から降りると、さつきとその工房の中に入ってしまった。幸吉はあわててその後について行く。

その建物は、幸吉達が働く銃の工房に比べてずっと小さかった。

普通の民家の一軒分くらいのスペースしかない。四人の職工が自分用に区切られたスペースに置かれている大きな木製の作業台に向かって、それぞれの作業にあたっている。作業台にはどれも大型の万力が設置され、木を削ったり研磨したりする何種類もの工具や道具が置いてある。その中には銃の工房にあるのとよく似た道具もいくつかあった。いたる所に、木材が積まれている。天井に通った梁に、完成品のバイオリンが何挺か吊るしてあった。

「リッチーニさん！」

シーザーが、そのうちの一番の年配者に声をかけた。

「おや、カブリーニ君か。また、見学かね？」

マウレッツィオ・リッチーニは、バイオリン造りの職人だった。かかえている職工は三人と小規模だが、堅実な仕事ぶりで曾祖父の代から続いている工房を守っていた。

「はい、いつもすみません。今日は、友人に見せてあげたくて」
言いながら、幸吉を紹介する。

「ほう…。君はこの国の人間には見えんが、どこの国の方かね？」
リッチーニは、まじまじと幸吉の顔を窺う。

「日本人です」

「ほう、日本の方か…。やはり、銃の勉強に来ているのかね？」

「はい、そうです」

「そうか。では、ゆつくりと見ていきなさい」

「はい、ありがとうございます」

思わず反射的に礼を言ってしまったものの、実際のところ、自分が何故ここに来ているのかはまだ定かではなかった。

「うん、そうなんだ。この工房の作業風景を君に見せようと思って、来たんだよ。ここは、休業日が平日なんでね」

幸吉の疑問を察して、シーザーがそう答えた。

それから、彼はほとんど声を発しなかった。四人のバイオリン職工達の作業に迷惑をかけるまいと。リッチーニ以下職工達は、黙々と自分の作業に没頭している。シーザーもそれを黙って凝視している。幸吉も、その雰囲気に従った。

見学するにはちようどうまい具合に、四人の職工達はそれぞれが別の作業をしていた。リッチーニは、バイオリンのネックの部分造っていた。別の二人は、それぞれ本体の表の部分と裏の部分だった。一番年齢の若そうな残りの一人は、その各々にニスを塗っていた。ロツツイオと呼ばれていたその若者は、どうやらリッチーニの息子のようにだった。

しばらくは、そういう会話のない状態が続いた。

一時間ほどたって、休憩に入ったリッチーニが見学者の二人の若者にカップチーノを振る舞ってくれた。

「随分いろいろな木材がありますが、バイオリンは、こんなに種類があるのですか？」

やっと質問することを許された幸吉は、堰を切ったようにリッチーニに訊ねた。

訊きたいことが山ほどあった。幸吉自身気づいていなかったが、その時の彼の関心度は銃に向き合うそれと全く同じ感覚になっていたのだ。

「ははは…。バイオリンにはそんなにたくさん種類はないさ。他に、ビオラやチェロがあるからね。バイオリンはバイオリンだよ」

「でも、どう見てもここには違う種類の木材が十種類はあると思いますが…」

「それはつまり、一つのバイオリンには少なくとも五種類の違う木材を使うからだよ」

「えっ…。一つのバイオリンは、一つの種類の木材から造られるのではないのですか？」

驚いて、幸吉が訊いた。

「ははは…。子供の教材用のバイオリンでも、一つなんかはあり得んよ」

「そうなんですか…」

「このクレモナの地にバイオリン造りが発達したのは、実は、こういった様々な材料が手に入りやすい立地条件があったからなのだよ」

「なるほど、そうなんだ…」

思わず幸吉が共感した。

必然なのだと思う。このクレモナの地にバイオリン造りが定着したのには、それなりの理由があったのだ。例えば、それは精密な部品を扱う時計産業がそれに適したスイスで発達したようにだ。

「たとえば、バイオリンの裏板はユーゴスラビアかバルカン・カエデ（メープル）が最適とされておる」

「ユーゴスラビア…」

「そうだ。しかし、それぞれの材料は、ただそれを切って持つてくるだけでは済まないのだ。五年から十年、ものによっては、二十年から三十年、適度な乾燥状態を保ちながらしかるべき倉庫で寝かせておくのだよ」

「ワインやウイスキーを一番美味しい状態まで熟成させるのと同じなんですね？」

「そうだ。まさに、その通りだ」

幸吉の共感に、リッチーニも嬉しそうだった。

「バイオリン職人は、目的のバイオリンを造るのに一番適したこれら数種の各部位の材料を選定しなければならん。正しい材料の選定が、良いバイオリンの誕生を可能にするのだよ。良いバイオリンが出来上がる条件の半分は製作者の技によるところだが、残りの半分は、まさにこの材料の選定にかかっているのだ」

幸吉が大きく頷き、リッチーニが説明を続けた。

「バイオリン造りにおいて、その使用する材料の選定は最初にして最重要の作業なのだ。従って、私ら製作者自らが材木店に足を運び、質の良い木材を自分の目で吟味しなければならぬ。さつき君は、木の熟成をワインのそれに例えたが、木材の選定に関しては、素材が命の料理と一緒になんだ。その為に、料理人が毎朝食材を見に市場に足を運ぶのと同じことなのだよ」

「そのやり方は、リッチーニさんだけではないのですか？」

「勿論だよ。この街のバイオリン職工達は、皆そうしている。何百年も続いているその精神が、イタリアのバイオリンの変わらぬ評価を支えておるのだ」

マウレッツィオ・リッチーニは、誇らしげにそう言いきった。

その隣りで、シーザーが嬉しそうに頷いていた。

彼は、このことを幸吉に伝えたかったのだ。そして、幸吉なら、必ずそれを理解できると確信していたのだ。

「シーザー、ここに連れてきてくれて本当にありがとう。君は、最高の友人だ！」

帰りの車中で、幸吉はシーザーに心から礼を言った。

素材と向き合うことの大切さを痛感したと、感謝の気持ちを述べた。

「そうなんだよ、幸吉。君ならきっとそのことに気づいてくれると思っていた！」

それを聞いたシーザーはとても喜んでくれた。

二人の会話は盛りあがった。そして、二人の若者は約束を交わした。いずれ、シーザーが独立して自分の工房を立ちあげた時、幸吉も一緒に手伝うと。二人で、世界最高の銃を造り上げようと。

だが、結局その約束は、果たされることはなかった。

四・翻弄の時代

昭和十六年、新春。

「ねえ、慎作。その字の意味は何？」

伊勢山皇大神宮の初詣から戻って来たその日の午後、新聞に目を通す慎作にカーリーナが訊いた。

ひらがなはもとより、かなりの漢字が理解できるカーリーナではあったが、その新聞の見出しの活字の中の「昆明」という字の意味が分からなかったのだ。それは、通訳としての彼女の職業病でもあった。

「ああ、これは日本語ではないよ。中国の雲南省という所にある町の地名だよ」

「そうか、日本語じゃないのね。それならいいわ」

彼女はその答に納得し、安心した。

「その昆明で何かあったの？」

「うん。海軍の航空部隊が、爆撃をしたようだ」

「まあ、年が明けたばかりだというのに……」

「そうだな。これで、アメリカとはますます険悪になるな……」

日中戦争の打開策は行き詰まり、結局日本は強硬策の道を選ぶことになってしまった。当然、東北部を除いた中国政府を後押しするアメリカとも、中国を通して対峙する図式は変えられなかった。日本が、ドイツやイタリアと同盟関係を強化したのも、このことが大きな理由の一つであった。

結局、それは最悪の形で結末を迎えることになった。

その年の十二月、日本が英米との戦闘状態に入った直後に、ドイツ・イタリアも連合国側との戦争に突入した。カーリーナも東京のイタリア大使館でのその業務に追われる日々が続くようになった。

二年後――連合国側に降伏したイタリアは、ドイツに宣戦布告し、事実上の三国同盟は崩壊し、イタリアは日本の敵国という立場になってしまった。カーリーナは、半ば強制的に日本を去ることになった。彼女は、慎作と別れの言葉を交わす間も与えられぬまま、他の大使館員と一緒に帰国用の船に押し込まれた。

更に二年後――世界大戦が終結した時、イタリアに居たカーリーナは、すぐに日本に戻る方法を模索していた。結果はどうあれ戦争が終結し両国に垣根がなくなった以上、一刻も早く慎作の元へ戻りたかった。だが、壊滅的な状況下にある遠い東洋の敗戦国に、民間人が渡航する目途などがたつわけがなかった。

しかし、彼女はあきらめなかった。慎作に会いたいという強い想いに加えて、大空襲を受けた横浜が焼け野原の状態だと知って、居ても立ってもいられなくなったのだ。横浜にいる菊枝が心配だった。何とか力になりたかった。

やっと、大使館時代に顔見知りだったローマの日本大使館員が、日本に渡る有力者を見つけてくれた。その有力者とは、外務省の児玉洋之助であった。彼は、占領軍との日本側の窓口になるCLO(終戦連絡中央事務局)という機関に配属が決まり、急遽、帰国することになったのだ。顔見知りの日本大使館員が、スイスにいる児玉に連絡を取り、話を通してくれた。情に厚い児玉はカーリーナの事情を理解し、彼女の熱意に応えてくれた。そして

彼女は、児玉のはからいで日本への特別便に同乗することができた。

五・勧誘

昭和二十八年、春。

滋賀県長浜市国友町―。

広島、長崎はもとより、東京などの大都市は戦争の空爆によって全面的な復興を余儀なくされていた。だが、この地だけは戦前と何一つ変わらぬ景色を保っていた。

「茨城県ですって…？」

田代幸吉は、その突然の来訪者の出身地を聞いて驚いた。

「はい、茨城県は友部という町から参りました」

内心幸吉は、その友部町はおろか、茨城県がどのあたりにあるのかもピンときていなかった。少なくとも、東京よりは北にあるというくらいは認識であった。それにしても、この滋賀県の国友まで来たとなれば、大変な距離であったことには違いなかった。

「そんな遠方から、はるばるこの私に会いに…？」

「はい。その為だけに参りました」

押しつけがましいわけでもなく普通にそう言って、男は大きな風呂敷包みをほどいた。

「地元の土産物です。どうか、お収めください」

「折角ですので、遠慮なく頂戴します」

重い箱であった。

「失礼ですがこれは？」

「これは、干し芋です。地元の名産品です。お口に合えばいいのですが」

「こんなに重いものをわざわざ茨城から…」

「それほどのことでもありません」

背筋を伸ばして座る礼儀正しいその男に、幸吉は好感を抱いた。幸吉より少し下の世代のその男は、三上則夫と名乗った。

聞けば、代々その友部の地で鉄砲造りをしている家柄で、最近引退した父親の跡を継いだという。

「なるほど、それでは私と御同業というわけですか」

「いいえ、そんな。国友一と謳われる田代さんに比べたら、私どもなんぞはまるで…」

「そんな。ご謙遜を…」

「いいえ、本当です。あなたの造られる銃に比べたら、私どもの造るものなんかはオモチヤの鉄砲です…」

滋賀県長浜市国友町は日本の銃職人達の聖地だった。それは、遠く室町の世に遡る。いわゆる種子島の鉄砲伝来の時だ。

当時、国友には武器や農耕器具を作る優秀な鍛冶職人が数多くいた。そこへ足利義晴の鉄砲を造れという命が下ったのだ。その後、織田信長らの鉄砲を取り入れた戦術の大成功と共に、他の地域でも鉄砲造りの動きが活発化した。その中でも、国友衆の作る銃は抜きん出て優れていた為に、その時々々の権力者に取り立てられてきた。

国友衆は、優れた銃の製造技術と共に、創意工夫に定評があった。徳川家康が、大阪城を攻略する際に大いに貢献したのが、国友衆が考案した様々な銃であった。家康はこの貢献に報い、国友の銃職人を幕府の正式な鉄砲鍛冶として定めた。田代幸吉は、その国友衆の末裔であった。

そして、その国友衆の中にあつて、若手でありながら幸吉の力量はすでに一番と言われていた。イタリアでの修行を終えて帰国すると、その評価は更に高くなっていた。だが、当の幸吉はあくまでも謙虚であった。

「そんなことは…。もしや、どこかで私の銃をご覧になったのですか？」

「はい。先日、偶然に銃の同業者に見せていただきました。その時、頭をハンマーで打たれたような衝撃と、震えるような感動を覚えました。それで、居ても立ってもいられなくなり、失礼を承知で参じた次第です」

「そうだったのですか…」

「どうやら、則夫の言葉は単なる儀礼ではなさそうであった。

「田代さん、この通りです！」

突然、その則夫が座布団を外して、土下座をした。

「ど、どうされました？」

「そんな田代さんに対して、失礼は重々承知の上でお願いがあります」

「何でしょうか？」

「どうか、私どもの会社へ一度でも来ていただけないでしょうか？」

「その…、茨城の友部にですか？」

「はい、そうです。遠方で大変ではありますが、それでも、是非ともおいでいただきたいのです。勿論、それにかかる運賃や宿代などはこちらで負担させていただきます」

「まあ、それはいいとして、いったい何の為にですか？」

「銃造りのご指導を賜りたいのです」

「し、指導ですか…？」

「はい。是非とも！」

則夫の言葉に力がこもる。

「まあ、とにかく。そんな格好をされていたら、私も落ち着いて話が伺えません…。どうか、座布団を当ててください」

「はい。では…」

則夫が座り直し、幸吉が茶を勧めた。

幸吉が、それをひと口飲む間に、則夫はゴクゴクと音を立てて茶碗の中をすべて呑み干した。よほど、緊張していたのだろう。

ひと息置いて、幸吉が笑みを浮かべて言った。

「三上さん。世間では私のことをいろいろと良く言っていたようですが、ご覧のように、私はまだこの世界では若輩の域を出ておりません。修行中の身もいところですよ。人様に、まして御同業の方に何かを指導するなんてことは、はなはだ分不相応な話だと思えます。そういうわけですから、どうかその件は…」

幸吉が、やんわりと辞退しようとする、

「いいえ、分不相応なんかではありません。あなたが言葉でどんなに謙遜されようと、あ

の銃がすべてを物語っていたのです！」

則夫が真剣な表情で、力強く返した。

「ま、まあ。それは…」

幸吉は、二の句を失った。

則夫のその言葉には、幸吉が否定する言葉を打ち消す説得力があった。

しばらく沈黙が続いた後に、幸吉が口を開いた。

「わかりました。では、もう少しお話を伺いましょう…」

「ありがとうございます。では…」

安堵したように、則夫が説明を始めた。

「朝鮮戦争の特需が終ったのを機会に、私は父から事業を引き継ぐことになりました。もともと私どもは狩猟用の銃を造って生計をたてていました。しかし、これからのこの国の発展の状況を考えて見れば、狩猟用の銃の生産だけでは事業として立ち行かないということに気づいたのです。銃造りの専業で生き残って行く為には、狩猟用の銃に加えて、競技用の銃の分野にも手を広げていかなければならないと考えたのです」

「確かにお国は、これからはどんどん工業に力を入れていきますからね」

今や世は、戦後復興とその次のステップである本格的な高度経済成長を目指す為に、官民が一体となって鉱工業の発展の方に力が注がれていた。

「ええ…。しかし、競技用の銃を扱うとは言っても、まだ需要の少ない国内だけでは食べていけません。そこで、海外に目を向けようと考えたのです。社名もこれを機に三上銃器製造会社からMJと言う名称にすることにしました」

「MJ…か。なかなかいい響きですね」

「はい、私も気に入っています。そして、世界に通用する銃を造ろうと思ったのです！」

「ほう、世界に…」

幸吉の瞳が、輝いた。

「はい。そこまでは、よかったです…」

そこで、急に則夫の説明が止まった。

幸吉には、その理由が手に取るように理解できていた。

「だが、競技用の銃を造るのはそれほど簡単ではなかったと、おっしゃりたいのですね？」
幸吉が則夫に代わってそれを言った。

「は、はい。その通りです…。当初の私は、競技用の銃も狩猟用とそんなに変わりがないと高をくくっていたのです」

「まあ、見た目は同じ散弾式銃ですからね」

「は、はい。その通りです。その通りなんです…。今さらながら、お恥ずかしい話です。今までと同じ技術、同じ材料で製造できると舐めていたのです。しかし、競技用の散弾銃を知れば知る程、それがとんでもない間違いであることに気づかされたのです。まったく、私は大バカ者でした…！」

そう吐き捨てるように言ってから、則夫が頭を抱えた。

「なるほど、そういうことだったのですか。それで、私の所に…」

幸吉は腕組をして、天を仰いだ。

再び、沈黙が訪れた。そして、田代幸吉が口を開いた。

「年齢がそれほど違わないのに、あえて生意気な事を申し上げます。今のあなたを見ていて、私は十二〜三年前の自分を見ているように思えました。大戦前にイタリアへ銃の修行に行った時のことです。当初私は、世界に冠たるイタリアの銃造りが、この国友のそれとほとんど変わらないことにながっかりしたのです。使っている材料も、銃を造る作業の様子も、工具も、ほとんど同じだったのです」

「ええっ。それは、本当ですか？」

「ええ、本当です。ですが、結果的にそれは間違いでした。日が経つうちに、それが大きな間違いであることに気づき始めたのです。当初の私には、上辺だけしか見えていなかったのです」

「何だか、今の私に似ていますね？」

則夫の表情が和らいだ。

「ははは…、まさに」

幸吉も、笑って続けた。

「一見すると、イタリアの銃造りはこの国のそれとほとんど変わらないように見えるのですが、実は、ひとつひとつのことが僅かに違うのです。しかし、その僅かな差こそが、この世界では決定的な違いになるのです。それこそ、百年、二百年の開きになるのです」

「な、なるほど…」

「そのことが分かり始めて、私は落ち込みました。そして、どうしていいのか分からずに焦るばかりの日々が続きました。そんな時に、その本質を教え、私の力になってくれたのが同じ工房で修業に励んでいたある友人でした」

「やはり、イタリアの方ですか？」

「はい、そうです。今の私があるのは、その友人のおかげであると言ってもいいくらいです。そして彼とは意気投合し、いずれ一緒に新しい銃造りをしようと約束をしました。私は、本気で彼の力になりたいと考えていました」

「それから、どうなったのですか？」

「でも、その後、第二次大戦が始まってしまい、結局その約束を果たすことはできませんでした。イタリアと日本は最終的には敵国同士になってしまいましたから…」

「そうだったのですか…。その恩人へのお返しが出来なかったのですね…？」

「ええ。私は、今でもそのことを悔いています」

「そうですね。わかります…」

則夫がしみじみと頷いた。

この時、二人の気持ちが一いつになった。

「ですから私は、あなたに協力しなければならぬと思いました」

幸吉がポツンと言った。

「えっ…。今、なんと？」

「こんな私でよろしければ、MJに伺うと言ったのです」

今度は、則夫の目を見据えて、はっきりと言った。

「ほ、本当ですか？」

「ええ、喜んで伺います」

幸吉は笑顔で答えた。

「三上さんの夢の実現に少しでもお役にたてるのであれば、喜んでそうしたいと思います。お話を伺っていると、あなたは銃造りの何たるかという一番大切な部分で、私と同じ志を持つているようですから…」

「いや、そんな。あなたほどでは…」

「そんなことはありませんよ。三上さんは銃に対して、とても真摯な方であると感じました。何よりも、熱い情熱をお持ちです。それに正直に申しますと、実のところ軍用の銃造りには辟易していたのです。今のまま国友にいたのでは、いつまでたっても新しい競技用の銃は造れそうもありませんから」

「じゃあ、本当に来てくださるのでね？」

「はい、間違いなく！」

「ありがとうございます。ありがとうございます！」

則夫は、幸吉の前に歩み寄ると両手で彼の手を握りしめ、何度も何度も礼を言った。

それから二週間後、田代幸吉は約束通り則夫の待つ茨城のMJ社に出向いた。

いったん国友に戻った幸吉は、更に二週間後、再びMJ社を訪れた。そして、彼はそのまま国友に帰ることはなかった。

六．もうひとつの倉庫

イタリア北東部、クレモナー。

大聖堂（ドゥオーモ）の鐘の音を背に受けながら、エミリオは父親の工房に向かって一目散に自転車を走らせていた。

父親のロッツイオが、ちょうど工房の前に停めた車に乗り込もうとしているのが見えた。

「お父さん、どこに行くの？」

自転車を急停車させ、エミリオが訊いた。

「ヴィザッティ商会に行くところだ。おまえも一緒に行くか？」

「うん。だと思って、急いで帰って来たんだ！」

そう言うと、エミリオは自転車を投げるように店先に置いて、父の車の助手席に滑り込んだ。

車を発進させると、ロッツイオはエミリオに訊ねた。

「ところで、エミリオ。何故、おまえはこれからお父さんがヴィザッティのところへ行くことを知っていたんだ？」

「だって、お父さんが昨日、新しいお客さんと打ち合わせをしたって言っていたからさ」「なるほど、そういうことか」

その答えを聞いたロッツイオが、嬉しそうに言った。

彼は、中学生になるこの息子が、自分の父親の仕事の流れをきちんと理解していることを喜んでいた。

ロッツイオ・リッチーニは、バイオリン造りの職人だった。かかえている職工は三人と小規模だが、堅実な仕事ぶりで代々続いている工房を守っていた。リッチーニの工房は、代々受注生産の形のみを続けてきた。つまり、客の注文に応じて造るのだ。バイオリンに

は定型はない、というのが一族の持論であった。だから、製作にかかる前に注文主との打ち合わせに時間をかける。客の要望が完全に理解できるまでとことん話し合う。時にそれは、客の性格や趣味趣向にまで及ぶ。それが完了したところで、やっと製作にかかる。そして、一番始めにする作業が材料の選定である。すなわち、契約している材木商店に足を運ぶのである。バイオリン造りにおいて、その使用する材料の選定は最初にして最重要の作業である。従って、製作者自らが材木店に足を運び、質の良い木材を自分の目で吟味しなければならぬ。それは、素材が命の料理と一緒だ。その為に、料理人が毎朝食材を見に市場に足を運ぶのと同じである。息子のエミリオは、その流れをきちんと理解していたのだ。

エミリオは、走る車の窓越しに自分が生まれ育った街並を見ていた。この地方は、バイオリン造りの歴史そのものであり、今も多くのバイオリン造りの工房がひしめき合っていた。そんな環境の中で育ったエミリオにとって、長男の自分が大人になったらこのまま父の跡を継いで、バイオリン職人になるということについては、何の違和感も持っていないかった。小さい時からバイオリンがおもちゃ代わりだった。手先の器用な彼は、それを分解しては組み立てて、父の真似事をしていた。妹の方は、それを持たされているうちに、演奏の方に興味が移っていった。だが、エミリオはそのまま造る方に関心を持ち続けていた。だから、今日も父親について行きたかったのだ。

クレモナ市街を出て少し走った郊外に、目指すヴィザッティ商会はあった。その材木商店は市内の多くのバイオリン工房とともに歴史を歩み、やはり、創業から二百年近い老舗であった。

ロツツイオは車から降りると、大きな木材の倉庫の隣にある事務所に向かった。

「よく来たな、ロツツイオ」

「やあ、ヴィザッティ」

商店主がにこやかに出迎え、二人は肩を抱き合って旧交を温める。二人は子供の頃から顔馴染みであった。

「今日は、エミリオも一緒か。しばらく見ないうちに大きくなったな。今、いくつだ？」

「十五歳です」

「というと、来年は高校生か？」

「はい」

「もう、そんなか？ それじゃあ、俺達も歳を食うわけだ。なつ、ロツツイオ。 ははは……」

ヴィザッティとは二か月前にも、これとまったく同じやり取りを交わしていたが、エミリオはそれを告げずに調子を合わせていた。

彼らは、すぐには材木の選定の打ち合わせには入らない。ヴィザッティが、自慢のカプチーノを旧友にふるまい、まずは長い世間話が始まる。それを知っているエミリオは、一足先に一人で倉庫の中へ入っていった。

直方体に加工されたさまざまな種類の木材が、ちょうどキャンプファイヤーのような桁状の積み方で、所狭しと保管されていた。それはいくつかのコーナーに区分けされている。なぜならば、一挺のバイオリンを造るのには何種類もの木材が使われるからだ。つまり、表板、裏板、ネック部等、部位によって使われる木材がすべて違うのだ。

バイオリン職人は、目的のバイオリンを造るのに一番適したこれら数種の各部位の材料

を選定しなければならぬ。正しい材料の選定が、良いバイオリンの誕生を可能にするのだ。良いバイオリンが出来上がる条件の半分は製作者の技によるところだが、残りの半分は、まさにこの材料の選定にかかっているのだ。

父親と商店主のヴィザッティの長い世間話がやっと終わって、二人が倉庫の方へやってきた。これから、さらに長い時間がかかるのは経験上わかっていたエミリオは、二人と入れ替わりに倉庫を出た。彼は、隣にあるもう一つの倉庫の方へ入ってみようと思った。そこの倉庫は、何故か父親が入るのを一度も見たことがなかったので、以前から気になっていたのだ。

隣の倉庫の中の様子は、いつも見ている方の倉庫とほとんど同じだった。だが、保管してある木材がいつものとは若干違うように思えた。

奥の方で、二人の男が木材を見ながら話をしていた。一人は三十代くらいで見覚えのあるこの従業員だ。もう一人の五十代くらいの方の男は、初めて見る顔だった。どうやら、客が木材の選定をしているようであった。

二人が、エミリオの存在に気付いた。

「あれ。リッチーニさんのところの坊ちゃんですよね？」

従業員の方が、エミリオに声をかけた。

「はい、そうです」

「バイオリンの方の倉庫は、隣ですよ」

従業員は、エミリオが間違えてこちらの倉庫に来てしまったものと勘違いしていた。

「はい、わかっています。…あの、こっちはバイオリン用の木材倉庫じゃないんですか？」

「ええ。こっちは銃の方の倉庫です」

「えっ。銃って、あの銃ですか？」

エミリオは驚いた。

「はい、そうです。銃と言っても短銃ではなくて、主に散弾銃やライフル用ですがね」

「だって、銃は、金属でできているんじゃないですか？」

そうエミリオが尋ねると、

「うん。確かに、機関部や銃身は君の言う通りに金属だけど、抱える部分は木材なのだよ」

と、客の方の男が、笑顔で答えてくれた。

エミリオが、それを頭の中で一生懸命にイメージしようとしているのを見て、その男が

従業員に言った。

「君、すまんが散弾銃を構えるポーズをしてみてください」

そう言われて、従業員がその場で銃を構えるしぐさをした。男は人差し指で、ポーズをとった従業員の肩のあたりを指して言った。

「ほら、ここあたりの抱える部分さ。銃床と言うんだ」

「ああ、その部分か！」

それを見たエミリオが嬉しそうに答えた。

「わかってくれてよかったよ。君のお父さんは、バイオリンを造っているのだね？」

「はい。あなたは、銃を造っているんですか？」

「うん。その通りだ」

「それは、何の木ですか？」

「クルミの木だよ」

「クルミですか…。バイオリンでは使わない材料ですね。産地はどこですか？」

「エミリオが尋ねると、男に代わって従業員が説明した。」

「それは、フランス・クルミです。アメリカン・ウオールナットもありますが、やはり、フランス産が一番ですよ」

「フランスが一番なのか…」

「そう呟きながら、エミリオはまじまじとその木材を眺めた。」

「クルミの木のどの部分ですか？」

「エミリオの質問が、子供の域を超え始めた。」

「木の根元の部分です」

「あの…、触ってもいいですか？」

「もはやエミリオは、そうしたくてどうしようもないといった様子だった。」

「いいですよ」

従業員が、笑顔で了解した。

「何で、銃にはクルミがいいんですか？」

「熱心に触りながら、エミリオが尋ねた。」

「そうだな…。それじゃあ、触るだけでなく、持ってみるといい」

「男の方がそう言っつて、木材のひとつを彼に抱えさせた。」

「どうだね？」

「あれれ、思ったほど重くないですね？」

「その木材を両手で抱えたエミリオが、拍子抜けしたように言った。」

「いつものバイオリンの木材の重さとさほど変わりがなかった。むしろ、軽くさえ感じた。銃の頑強なイメージから、もっと重いものだと思像していたのだ。」

「そうだろう。その軽さが理由の一つなのだよ。人間が抱えて、時には長い時間、山の中を持ち歩くものだからね。重い木は、銃には不向きなのだよ」

男が、詳しい説明を始めた。

「クルミはそのとおりに軽いのだけれど、でも、その割には堅いんだ。そのくせ、粘りもあるのだよ」

「軽いのに、堅くて、しかも粘りがある？」

「そうだよ。だから、衝撃に強くて、なおかつ銃を撃った時の反動を吸収してくれるのだ」

「へえー。クルミって、凄いですね」

「そう感心するエミリオの輝く瞳が、彼の感情をストレートに現わしていた。それを見た男は、喜んで説明の続きをする。」

「それだけじゃない、クルミにはもう一つ大きな長所がある。温度や湿度による歪みなどの変形が少ないのだ」

「それは、銃にとつてそんなに大事なんですか？」

「うん、そうなのだよ。とても大事なことなのだ。もし、木の部分が歪んで変形してしまうと、それは銃全体に影響するからね。だんだん狂いが生じてくる。つまり、銃の命中精度に関わってくるといわけなのだよ。ブナ、カエデ、サクラなど、他にも銃に使われる木はないわけではないが、加工中や使用中に微妙に狂いが出てくるのだ。その点、クルミ

にはそれがほとんどない」

「へえー。凄いや！」

エミリオの瞳が、ますます輝きを増してくる。

「ただ…、残念ながら短所もあるのだ」

男が、少し残念な顔つきになった。

「ええっ。お話を聞いていると、完璧な材料に思えますけど…。短所って何ですか？」

「うん…。実は、クルミは、他の木に比べて成長が遅いのだ」

「遅いと、何で悪いんですか？」

少年には、まだ理由がわからない。

「成長が遅いということは、出荷される木の数が少ない。つまり、値段が高いつてことなんだよ」

そう言つて男は、従業員の顔を見ながら続けた。

「だから、今日もこうして値段を安くしてもらえるように、一生懸命、彼と交渉しているところなのだよ」

男は、冗談を交えて説明した。

「か、勘弁して下さいよ、カブリーニさん。そっちの方の話は、社長として下さいよ」

従業員が、おどけて見せた。

「ははは…、これは失礼」

カブリーニと呼ばれた男と従業員が笑い出した。

「僕には詳しくはわかりませんが、バイオリンの材料も、物凄く高いんですよ」

エミリオは、カブリーニ達の冗談にかまわず、真面目に意見を言った。

「うん、うん。そのようだな。フランス・クルミも高級だが、バイオリンの方はもっと凄いらしいな」

カブリーニは、真つすぐなエミリオの受け答えに対して、冗談を交えてしまったことを少し反省した。

「君、名前は？」

「エミリオ・リッチーニです」

「そうか。エミリオ。君は本物の銃を見たことがあるかい？」

「ないです」

「見てみたいかね？」

「はい、是非！」

エミリオの瞳が、今までで一番輝いた。

「そうか…」

少し考えてから、カブリーニは上着のポケットから名刺を取り出してエミリオに渡した。

「僕の工房はブレシアにある。ここから、そう遠くない場所だ。同じロンバルディア県同士だよ」

彼は、名刺に印刷してある住所の部分を指で示しながら、説明した。

「君は若いのに、なかなかのものだ。いつでも歓迎するから、遊びに来なさい」

そう言つて、微笑んだ。

「はい、必ず行きます！」

エミリオは嬉しそうに名刺の文字を読んだ。
そこには、ファーマス社という会社名と、代表取締役社長シーザー・カブリーニという名前が印刷されていた。

七・総合芸術

その週の土曜日の昼、エミリオは学校の授業が終わるや否や、校舎の脇に置いてある自転車に飛び乗った。

いつもの自宅方向とは違って、国道に向かう。国道に出ると、ひたすら北へ走る。目的地まではこの国道を真北へ一直線だ。

クレモナから四十キロも離れていない近隣にイタリアを代表するもう一つの手工業の町があった。同じロンバルディア県にあるブレシアは、銃造りの町であった。クレモナのバイオリンと同じように、このブレシアには多くの伝統ある銃の工房があった。

国道を降りてからは、図書館で書き写した手製の地図を頼りに目的の工房へ向かう。午後の一時半を過ぎた頃には、ファーマス社の工房に到着した。

受付の女性に、この間本人からもらった名刺を見せる。しばらく、エントランスで待っていると、彼が笑顔でやってきた。

「おう、エミリオ。さっそく来たか！」

「カブリーニさん！」

「では、工房を案内してあげよう。ついてきたまえ」

二人は、まるで仲の良い親子のように並んで事務所棟を出ると、広い芝生に囲まれた敷地内に点在する工房棟へ向かった。

ひと口に工房と言っても、その規模は様々である。例えば、エミリオの父ロッツィオのバイオリン工房は、普通の民家の二軒分くらいのスペースしかない。そこで、働いているのはロッツィオ自身も含めて四人だ。工房によっては、もっと小さい規模のものも沢山ある。そう考えると、カブリーニに案内された工房は、とても大きかった。工房というよりは工場に近かった。その大きくて広い建物が敷地内に二棟並んでいた。

最初に案内された建物の方は、主に木材を使った部品を扱う部門のようであった。温度と湿度の管理がされている建物だった。そこでは、十二人ほどの職工が自分用に区切られたスペースに置かれている大きな木製の作業台に向かって、それぞれの作業にあたりている。作業台にはどれも大型の万力が設置され、木を削ったり研磨したりする何種類もの工具や道具が置いてある。その中には、父親のバイオリン工房にあるのとよく似た道具もいくつかあった。いたるところに、木材が積まれている。この間ヴィザンティ商会で見たのと同じクルミの木材である。すでに、銃床に近い形にカットされたものもある。

カブリーニは、作業のプロセスが分かり易いように、なるべく工程の順番に沿って作業を見せ、説明してくれた。大きな木の素材の切り出しを行なっている所からスタートして、原型ができていて、それを研磨している作業台へと移っていく。そして、最後に完全な銃床の形が完成している作業台のへ移る。

「これが、仕上げの塗装に入っているとところだよ」

職工が、刷毛でニスを塗っている。

「アルコール系とオイル系の、どちらのタイプのニスを塗っているのですか？」

見学を始めた時から、エミリオの質問は休む間がなかった。

カブリーニは、そのひとつひとつに丁寧に説明をしてきていた。時に、エミリオの鋭い質問は、このように専門家の彼を唸らせるものがあつた。

「オイル系のニスだよ。アルコール系では銃には少し物足りないのだ。粘りとかの点でね。今、塗っているのはアマニ油を混ぜたものだよ。これを、乾いては塗るを繰り返すのだ。すると、しまいには美しい芸術品になるってわけだ」

「芸術品ですか？」

「そうだよ。バイオリンにも引けを取らない程に美しくなる」

「カブリーニさん。早く完成品が見たいです！」

それを聞いてエミリオは、いても立っても居られなくなったようだった。

「よし。では、隣の棟に行こう」

隣の棟は、最初の棟によく似ていた。

だが、そこには最初のように木材は置いてなかった。代わりに、様々な金属製の部品がところどころにあつた。その中の細長い鉄の管が、銃身に使用されることぐらいはエミリオにも想像ができたが、後はまるでわからなかった。

そこでは、やはり十二人ほどの職工が自分の持ち場に置かれている大きな木製の作業台で、それぞれの作業にあたっている。作業台に大型の万力が設置されているのはさつきと同じであつたが、金属を削ったり研磨したりする工具や道具は、父親のバイオリン工房で見かけないものばかりだった。

カブリーニは、さつきの棟の時と同じように、完成までのプロセスが分かり易いように、エミリオに工程の順番に沿って作業を見せ、説明をしていった。

そして、最後に完全な銃の完成品がある作業場へ行った。

「さあ、そしてこれが完成品だ」

架台に、同じ形の散弾銃が並んで立て掛けてあつた。

そのうちの一本をカブリーニが取って、台の上において見せた。

エミリオは、その美しさに息を飲んだ。

「確かに、バイオリンは美しい。完成された美しさだ。だが、銃も、それに負けないくらいに美しいだろう？」

「は、はい……」

エミリオは、今までの質問攻めが嘘のように、それ以上の言葉を発することができなかつた。

「よく使われる比喻で例えると、バイオリンの美しさが女性的なそれだとすると、銃は男性的ということになるだろう」

「え、ええ。確かに……」

「忘れるな、エミリオ。銃造りとは、木と金属が織りなす、総合芸術のことなのだよ」

カブリーニが誇らしげに言った。

「は、はい！」

確かに、そのとおりでと思つた。エミリオは、鳥肌が立つほどに興奮していた。

八・理解者

昭和四十三年―。

イタリア北東部、ロンバルディア県―。

ブレシア郊外にその銃工房があった。

近衛慎一郎が就職したファーマス社は、ベレッタ社のような大量生産の大企業とは違って、主にカスタムメイドを中心にした中規模の工房であった。従って、三十人近くいる工員一人一人のスキルのレベルが非常に高く、他の同業者から修理を持ち込まれることも珍しくなかった。こうした卓越した技術力と社長のシーザー・カブリーニの人柄もあって、特に、クレ―射撃の上級者の間では高く評価されている工房であった。

そんな質の高い工房であった為に、さすがの慎一郎もすぐには銃に触る作業はさせてもらえなかった。入社当時は、もっぱら工房群の裏手にある試験射撃用の小さな射撃場で、クレ―の残骸の掃除などの雑用に明け暮れる毎日だった。

一週間ほど経ったその日、射撃場に二十代半ばくらいの工員が一挺の銃をかかえて試射に訪れた。彼が手にする銃は、始めて見る型だった。

彼は慎一郎に気が付くと、声をかけてきた。

「ねえ、君。すまんが、プーラーを頼めるかい？」

「いいですよ」

男に言われて、慎一郎が操作室に入った。

「設定はどうします？」

まだ日常会話程度しかできない慎一郎は、即席のイタリア語が通じない時には、すぐに英語に切り替えて話すようにしていた。

「ああ、角度のセッティングのことだね。じゃあ、最初は真っすぐだけにしてくるかな」
どうやら、男に通じたようだった。

合図とともにクレ―が発射され、男が射撃を始めた。

当たったり当たらなかったりであった。十発ほど正面方向に飛ぶクレ―を撃った男は、一旦射撃を止めた。しばらく首を傾げて考えてから、再び慎一郎の方に発射方向の合図を送ってきた。今度は、左右に飛ばしてくれという。それは、言葉を交わさなくとも、手の指の表現で充分に通じる。慎一郎は、指でOKマークを作って応えようと、指示通りクレ―を左右に飛ばす。これも、当たったり当たらなかったりであった。左右にそれぞれ十発ほど撃ってから、男は試射を中断した。

男がそばのベンチに腰掛けた。

しきりに銃を見ながら、何か考えに更けているようであった。慎一郎はプーラー室から出て、彼の元へ近づいた。彼が手にする銃に興味を持ったからだ。

簡単なイタリア語と英語とジェスチャーを交えた二人の会話が始まった。

「見たことのない銃ですね。試作品ですか？」

「うん。僕のオリジナルだ」

「美しい銃ですね」

「ありがとう。それは素直に受け取るよ。僕自身、その部分には、こだわりを持っているからね。ただ、肝心の中身の方がね……」

「納得がいかないようですね？」

「ああ、そうなんだよ。今回はそれなりに自信があったんだが、やはり何かが違うんだ。微妙な何かが……」

「微妙な何か？」

「うん。引き金を引くまでは、目指した通りに造れているようだ。だが、引いてから発射までの何かが違うんだ」

「それが、わからない？」

「うん。どこかで旨く伝わっていないようなんだ。途中で、何かが悪魔をしているんだ。だが、それがずっとわからないんだ。もともと、この点はもう何年も乗り越えられない課題なんだけどね。いつも、ここで壁に突き当たるんだ。ああ……、僕にもっと射撃の腕があったらな」

男は、そう言っただけ息をついた。

その男の説明した言葉は、完全にはわからない。だが、彼が言わんとしていることは慎一郎にも十分に伝わっていた。彼が言っているそれは、ある意味銃造りの根幹の部分でもあった。つまり、造り手と撃ち手との一番大事な部分の話であった。

「僕なら、わかるかもしれない」

慎一郎が、日本語でぼつりと呟いた。

「えっ。今、何て言った？」

男は、慎一郎の雰囲気からその言葉の意味を悟ったようだった。

「僕なら、その何かがわかるかもしれません」

今度は、英語ではっきりと言った。

「よし。やってみてくれ」

男は、迷うことなくその銃を慎一郎に差し出した。

何かの、不思議な説得力が彼にそうさせた。男は足早にプーラー室に向かった。セッティングの準備が整うと、ガラス張りの室内からOKのサインを出す。

まず、正面方向にクレールが発射される。慎一郎は、事も無げにその十枚のすべてを粉砕した。続けて、発射された左右の二十枚も、難なくすべてを粉砕する。

男が、プーラー室から駆け出て来た。

「き、君は！」息を切らせながら、男が話しかける。

「凄腕じゃないか！」

「別に、僕の腕前を披露する為に撃ったのではないですよ」

慎一郎は、さらりと言った。

「それにしても……」

その男は、目の前のイタリア語が不自由な、しかし、射撃の腕が常人離れたその青年が何者なのかを計りかねていた。

そして、慎一郎があっさりと言った。

「どうやら、わかりましたよ」

「えっ、何が？」

「例の、「微妙な何か」のことです。しっくりと、伝わらない理由ですよ」

「本当か？」

「ええ、おそらく」

「き、聞かせてくれ」

目の前の青年の素性はともかく、男は早くそれが知りたかった。

「まずこの銃は、今まで僕が撃った銃の中で一番いい銃だと思います。構えた時のフィット感。トリガーを引く時の感触。そして何よりも、抜けて行くような発砲感……。この説明が、英語混じりの表現でどこまであなたに伝わっているかはわかりませんが、どれも素晴らしいと感じました」

「ありがとうございます。十分に伝わっているよ」

「そうですか、よかったです。ですが……」

言いかけて慎一郎は、初対面の相手に、それを言っていないものか迷った。

「何かあるんだね？ かまわないから、遠慮なく言ってくれ」

「はい。では言います。ですが、発砲時にわずかにブレるのです。勿論、他の銃の比ではありません。比ではありませんが、しかし、わずかに左右にブレるのです。それが、あなたが言っているところの微妙な違和感の正体でしょう」

「わずかに、左右に……。君には、それがわかるのか？」

それを聞いた男の目が輝いた。

「はい、僕にはわかります。初めのうちは、それはごくごくわずかな違和感です。おそらく、普通の人には感じられないほどの。でも、撃って行くうちに、僕にはそれが我慢できないほど大きく感じられるようになってしまうのです」

「そうなのか……」

男は、この青年の得体のしれない物凄さを理解し始めていた。

「僕は今まで、立場上何人も一流の射撃手と接してきた。それも、超のつく一流の射撃手達だ。そして、そのたびにこの部分の感想を聞いてきた。だが、誰ひとりとしてこの点を具体的に指摘することはできなかった。その中には、この間の東京オリンピックの金メダリスト、エンニオ・マッタレリも含まれている。残念ながら、その彼ですら答えを出すことはできなかったんだ。だから、人間の感覚では説明のつかないものだと言っかけていたんだ。このわずかな違和感に気づいたのは、君が初めてだ！」

男は、感激していた。

「やっぱり、僕の方向性は正しかったんだ！」

男の感激は収まらなかった。

長い間この問題に突き当たって悩んでいたからだ。そして今、その壁を乗り越えられる可能性を持つ男と出会えたのだ。この青年の出現によって、もう一段高い領域の銃を造ることが夢でなくなるかもしれないのだ。

「す、すまん。まだ自己紹介もしていなかった。僕は、エミリオ・リッチーニだ」

そう言って、エミリオが右手を差し出す。

「近衛慎一郎です」

慎一郎がイタリア語で名乗り、二人は握手を交わした。

「えっ、コノエって……？ ひょっとして、君が、この間入社してきという日本人の……？」

「ええ、そうです」

「東洋人には見えないが、てっきり同じイタリア系かと…。道理で言葉が…。まあ、そんなことはどうでもいい。とにかく、これからもまた意見を聞かせてくれないか？」

「ええ、僕でよければ」

「よし、決まりだ！」

彼は、心底嬉しそうだつた。

「コーヒー・ブレイクだ、コノエ。もっと、話を聞かせてくれ。さつそく、そのブレの正体を探るぞ。これからは、おそらくミクロの世界での戦いになるな！」

工房に向かうエミリオは、小躍りしていた。

その日以来、二人はコンビのように一緒に活動し始めた。

エミリオが銃を微調整すると、慎一郎がすぐに試射をし、意見する。それが、毎日のように繰り返された。若きコンビは、日を追うごとに工房内でも認知されるようになってきた。エミリオを自分の息子のように可愛がっている社長のカブリーニも、二人のやりたいうように自由にやらせてくれた。

一か月ほど経ったある日の夕方、エミリオが慎一郎の所へやってきた。

「慎一郎、今夜は空いているのか？」

「ええ、まあ」

「よし、飲みに行こう。今日は、僕のおごりだ」

「そういうことなら、喜んで」

九・家庭教師

ブレシアの中心街にその店はあった。

ラ・グロッタという名のそのパブは、エミリオの行きつけの店だった。

彼は、この店の出す大好物の生ハムを肴にグラッパを飲むのが好きだった。いつもは、二人はカウンター席で飲んでいたのだが、この日のエミリオはテーブル席の方を選んでいった。慎一郎はすでに四度この店に連れて来てもらっていた。イタリアの法律は、未成年の慎一郎にも寛大だった。だが、彼が自分から明かさない限り、彼を見て未成年とわかる者はいないだろう。

乾杯をしてから、エミリオが言った。

「なあ、慎一郎。僕は、今はファーマスで修業の身だが、実は、近いうちに独立して、このブレシアに銃のワークショップを開きたいと思っているんだ。勿論、社長の了解も取っている。自分の銃造りに専念したいんだよ」

「そうですか、それはいい考えです。あなたなら、充分にやっていけるでしょう」
彼ならそれができると、慎一郎は確信していた。

二人が働くファーマス社は、一流の銃職人ばかりが集まっている。だが、エミリオの腕前はその中でも抜きん出ている。

「その時は、慎一郎、君も一緒に来てくれないか？」

エミリオらしい唐突な申し入れだった。

「ははは…、嬉しいですね。その時は、考えましょう」

慎一郎が、軽く笑って答えた。

「慎一郎。是非、前向きに考えてくれ。大学の方は、そのまま通ってかまわない。パートナーは君以外に考えられないんだ。いや、君と出会ったからこそその決断なんだ」

エミリオは真剣だった。

「ダニエル・ペラッツイは、エンニオ・マッタレリと出会ったことで、自分の新しい銃を世に送り出すことができた。僕にとつてのそれが、君なんだよ！」

彼の言葉には、熱がこもっていた。

「エミリオ、僕を買いかぶりすぎですよ」

「いいか、慎一郎。これは社交辞令ではない。本心だよ。君には普通の人間にはない特殊な能力がある。僕にはそれがわかるんだ。その力を是非僕の銃造りに貸して欲しいんだ」

「そこまで言っていたら、光栄です」

慎一郎は、今度はきちんと返答した。

実際、嬉しい申し入れであった。単に、銃造りを学ぶということだけであれば、イタリヤには名匠と呼ばれる職人が他に何人もいる。彼らに比べればエミリオはまだ若い。経験も浅い方だろう。だが、共に銃造りを研鑽していこうということであれば、天才と言える彼以上の相手はいなかった。しかも、エミリオには先人達にはない優れた感性があった。それは、父親がバイオリン職人であるという彼の生い立ちに由来しているのかもしれない。慎一郎は、そんな彼のこだわりと才能に強く惹かれていた。文句のつけようのない最高のパートナーであった。

だが、ひとつだけ問題があった。自分を推挙してくれた親友三上恵造の父、則夫の存在である。今の慎一郎は、勝手に会社を替えられる立場ではなかった。

「とても嬉しい話ですが、僕は日本のクレー射撃協会の推薦で今のファーマスに入社しています。ですから、自分の都合でいきなり辞めるわけにはいかないのです。少なくとも、一年はファーマスに居て、しかも辞める時には円満でなければ…」

慎一郎は、この難しい話の内容をエミリオにイタリア語で伝えるのに苦労した。

英語を交えつつ、何とか伝えきったと思つたところで、エミリオが急に視線を慎一郎の顔から外し、店の入口の方に向けた。

そして、手を振りながら誰かに向かって声をかけた。

「マリエッタ。ここだ、ここだ！」

声をかけられたのは、二十歳くらいの若い女性だった。

薄茶色の髪の毛に、瞳の大きなイタリア女性だった。

「慎一郎、紹介するよ。妹のマリエッタだ」

「始めまして、マリエッタです」

「近衛慎一郎です」

慎一郎が、席を立てて挨拶をした。

「名前を聞くと、本当に日本の方ですね。見た目は私達と同じように見えますが」

「お兄さんと初めてお会いした時も、同じように言われました」

と、慎一郎が答えると、

「そうなんだよ、マリエッタ。だから、慎一郎と僕は、初めから違和感なく付き合ってい

るんだよ。天才は天才を知る、てやつだ。ははは…」

エミリオが嬉しそうに説明する。

「ただ、ひとつだけ困ったことがある。彼はまだイタリア語が初心者なんだ。だから、打合せをしている時に、たまにコミュニケーションに支障がでるんだ。お互い、細かいところでの微妙な話のニュアンスが、伝わりにくい時があるんだよ」

確かに、エミリオの言うとおりだった。

慎一郎も、ことあるたびに彼と同じ思いをしていた。息の合うコンビにとって、それは唯一の課題であった。

「そこだ。おまえに、彼のイタリア語の家庭教師になってもらいたいんだ。どうだ？」

エミリオの申し入れに、マリエッタは、慎一郎の顔を笑顔で見ながら答えた。

「ええ。私でよかつたら、喜んで」

驚いたことに、彼女は二つ返事で引き受けた。

「で、でも…」

慎一郎が、珍しく慌てた。

「わざわざ、その為に妹さんに時間を作ってもらうのは…」

「ははは…、その点は心配いらぬよ。だって、マリエッタは、ここからすぐ近くの学校に通っているんだから。授業のついでに、いくらでも時間はとれるだろう？」

「本当ですか？」

「ええ、マントヴァ音楽院の二年生です」

「その学校は、そんなに近くなんですか？」

「ええ、ブレシアの隣町ですよ」

マントヴァ市は、ブレシアからも近く、リッチーニ兄妹達の実家があるクレモナからも近かった。マリエッタはその音学院でバイオリンを専攻していた。それは、彼女の意志というよりはバイオリン職人である父親ロツツイオの強い要望であった。

「でしたら、ご迷惑のかわからない範囲でお願いします」

「遠慮しないでくださいね。それに、結局それは、兄の為になることなのです…。あなた、兄にとって救世主のようですから」

「僕が？」

「ええ。慎一郎に出会えたおかげで、僕の銃造りが十年早く進みそうだとか。彼は、すでにマツタレリを超えているとか…」

「こら、マリエッタ。本人の前で、そんな話をするなよ。照れくさいだろう」

とは言いながら、エミリオが満更でもなさそうに生ハムを口に頬張る。

「だって、この一カ月間のお兄さんは、口を開けば、近衛さんの話ばかりですもの」

マリエッタが笑いながら言った。

「そうかなあー」

エミリオは、グラッパを呷りながらとぼけて見せた。

実は、今日のこの場は、事前に彼女と打ち合わせてあったのだ。慎一郎とより完璧なコミュニケーションをとりたい為に、彼がマリエッタにイタリア語の個人教授を頼み込んでいたのだ。彼女は、あまりの彼の熱心に押されて、とりあえず会ってみてから決めるということにした。エミリオには自信があった。会えば必ず彼女も、慎一郎のことを気に入

つてくれると。はたして、エミリオの思惑通り、彼女はひと目で快諾してくれた。

「よし。今日は、協力的な妹の為に、少し奮発してやるとしよう」

エミリオが上機嫌で、ワインをボトルでオーダーした。

テーブルに運ばれてきたのは、モンテス・パシット・ロツソという少々値の張る地元産の赤ワインだった。それは、ぶどうの旨みを感じられる味わいを持つマリエッタの大好きな銘柄であった。

エミリオが音頭をとった。

「よし。では、慎一郎の新しい家庭教師に乾杯だ！」

三人がワイングラスを合わせた。

その夜、慎一郎とリッチー二兄妹は、時の経つのを忘れて語り明かした。

十、再会

西ドイツ、南部―。

近衛慎一郎の駆るドウカティGT750は、オーストリアを抜け、西ドイツのローゼンハイムから国道八号に入っていた。

慎一郎は、このうえない爽快感に浸っていた。

一年間、寝る間も惜しんで学業と銃の修行に明け暮れてきた彼にとって、バイク・ツーリングは唯一の息抜きであった。彼が選んだGT750は、まだ市場に出されてから日が浅く、本国のイタリア国内でしか販売されていない。バイク好きの慎一郎にとっては、これ以上の幸運はなかった。当然のように、彼はすぐにそれを購入した。

慎一郎は、いわゆる貧乏留学生ではなかった。彼の口座には、充分過ぎる程の生活資金が蓄えられていた。父の慎作が彼に遺した観光会社を後援者だった工藤健吉が、常識では考えられない程のいい条件で買い取ってくれたからだ。そのおかげもあって、イタリアへ渡り、大学の勉強と銃の修行に没頭することができているのだ。

慎一郎は、西ドイツ国境に入ってから、一時間もかからずにミュンヘン市内に入ることができた。アウトバーンのおかげで、日本では考えられない速さの巡航スピードで走ることができたのだ。それを味わえただけでも、ドイツに来た甲斐があったとつくづく慎一郎は思う。だが、今回のドイツ訪問はそれとは別の目的であった。

ミュンヘン市内は、街中が一週間後に開催を控える夏季オリンピックの装飾で彩られていた。街のどこもかしこもが五輪のマークで溢れていた。中央駅から二キロほど離れたところにプラッツルという名のホテルがあった。ビアホールで有名なホフブロイハウスがあるこの広場周辺は、中世からの街並みが残る一角で、そのホテルも歴史的な建築物の中に入っていた。

慎一郎は、GT750を石畳の路肩に停めてホテルの中へ入り、待ち人を探した。

ロビーはすでに人でごった返していた。その大半はオリンピック関係者なのであろう。一週間後からは、これに更に一般の見物客が加わることになるはずだ。

そして、その奥のソファア・コーナーには懐かしい面々が待っていた。

「よう、近衛！」

「近衛さーん！」

慎一郎に気がついた三上恵造と浅尾義和が、イスから立ち上がって嬉しそうに歩み寄ってきた。恵造の父の則夫も一緒だった。

「よう、久しぶり！」

恵造と義和に再会の笑顔を送ると、慎一郎は則夫のほうに向かって折り目正しく頭を下げた。

「三上さん、ご無沙汰しております」

「近衛君、元気で安心したよ。イタリアではうまくやっているかい？」

「はい、おかげさまで。順調です」

「それは、良かった。まあ、積もる話もあるし、とにかくチェックインを済ませてから外に出て話そう。勿論、泡の出る奴を飲みながらだ。ははは…」

則夫が嬉しそうに言った。

今回のミュンヘンでの彼の楽しみの一つは、息子の恵造と公衆の面前で堂々とビールを飲めることであった。日本では叶わなかったが、このドイツでは、ビールやワイン類の飲酒は、十六歳以上から認められているのだ。

一同は、準備をしてからホテルの外へ出た。行先は言うまでもなくホフブロイハウスであった。ミュンヘンの中心部から歩いて五分くらいの所に位置するこのビヤハウスは、有名な観光名所でもあった。一階のビアホールはちよつとした体育館ほどの広さがあり、長テーブルに長椅子がぎっしりと並んでいる。

「乾杯！」

綺麗な絵柄の陶器でできた四つのジョッキが、勢いよく交わされた。

皆は、一年ぶりの再会を喜び合った。

「ははは…。こうやって、恵造と堂々とビールが飲めるとはな。さすがはビールの本場、ドイツだ」

則夫は上機嫌だった。

「実は、イタリアも、ビールやワイン程度なら十六歳から飲めるんですよ」

慎一郎が説明した。

「本当かい？ まあ、食卓にワインが並ぶお国柄だからな。じゃあ、近衛君も、もうかなり行ける口になったのかね？」

「ええ。この一年間で、相当鍛えられましたよ。ファーマス社の友人とは、週一回はパブに行っていますから」

「へえ、そんなに親しい友達ができたんだ。勿論、イタリア人なんだろう？」

滅多に人に心を許さない性格のはずの慎一郎が、まして異国の地で、親しい友人を作ったことに恵造は少し驚いた。

「うん、エミリオって言う会社の先輩だ」

「歳は近いのか？」

「そうだな、俺達よりも四、五歳くらい上だ」

話題の中心は当然の流れのように慎一郎のイタリアでの近況報告へ移っていく。そして、その中でも日本から来た三人に共通する最大の関心事は、やはり本場イタリアの銃造りの情報であった。

「そのエミリオさんは、やっぱり銃職人なんですか？」

「今まであまり発言をしなかった義和が、身を乗り出してきた。」

「ああ、そうだ。しかも、天才だ」

「わー、天才ですか！」

それを聞いた彼の目が輝き出していた。

「ああ。おそらく、ダニエル・ペラッツィイ以来の天才銃職人だと思うよ」

「それは、凄いな！」

その人物の名前を聞いて、三上親子も口をそろえて驚きの言葉を発する。

皆は一気に話に引き込まれていった。すでにペラッツィイの名声は世界中で認められるところとなっていた。そして、その偉大な名前が、慎一郎の口からごく自然と出てくることに皆は興奮を覚えずにはいられなかった。それは、今までのように雑誌や業界誌の話ではなく、まぎれもなく、日常の現実の話として語られているのだ。彼らは自分でも気づかぬうちに長イスからどん慎一郎の方へ前のめりになっていった。

慎一郎は、ファーマス社の入社から、エミリオとの出会いを話し始めた。

三人は、一言一句も聞き洩らさぬという感じで熱心に聞き入った。その話題は何時間も途切れることがなかった。それもそのはずだった。銃造りに人一倍関心のある四人が、一同に顔をそろえているのだ。

「そういえば、辰夫は残念だった」

慎一郎の口からやつとその親友の名前が出たのは、銃の話始めて三時間以上経ってからであった。

「ああ。俺と浅尾君は大学の夏休みだから来れたが、あいつの会社は観光業だからな。今が書き入れ時だ。どうにもならなかったようだ。地団駄を踏んで悔しがっていたよ」

笑いながら恵造が説明すると、

「地団駄どころか、工藤さん、半べそかいていましたよ」

義和が、その時の状況を真顔で更に詳しく補足する。

義和にはそんなつもりはなかったのだが、それを聞いた他の三人はこの日一番の大笑いになった。

十一・練習者たち

翌日、朝食を済ませた四人はホテルを出た。

三上則夫ら三人は、ホテル側が用意してくれた送迎用のバスに乗り込み、慎一郎は自分のバイクでその後について走った。

オリンピックの射撃関係の競技施設は、他の競技の施設とは違ってミュンヘン市の中心部から、かなり離れたところにあった。市街を抜けてしばらく畑や森の中を走っていく。その競技の特殊性から市街地から離れた所にあるという点では、日本もドイツも変わりがなかった。東京でのオリンピックの時も、射撃関係の会場だけは東京から離れた埼玉県の所沢市であった。

だが、到着したミュンヘン国立射撃場は、国立の名に恥じない立派な施設であった。レ

ストランやオフィスはもとより、宿泊施設やショップも充実しており、クラブハウスというよりは大型のホテルといってよかった。ショップにはイヤープロテクターのような射撃競技の関連グッズに加えて、五輪のロゴの入ったTシャツや記念バッジといったオリンピック関連のグッズも数多く並んでいた。

奥に進んで競技施設の入り口の前に来ると、慎一郎達は一人ずつ則夫からIDパスを受け取った。国際オリンピック協会が発行している正式な関係者用の通行証である。ここから先は、このパスがない人間は入場できないのである。今回、三上則夫は日本オリンピック協会に所属するクレール射撃協会の競技関係者としてミュンヘンに滞在していた。理事である彼は、他の協会関係者よりも早めに現地入りをして、恵造達を見学に連れてきてくれたのだった。

競技施設の中に入って見て、則夫達一行は更にそのスケールの大きさと施設の充実ぶりに驚かされた。建物にくっつくかたちでライフルやピストルの競技場が造られている。そのすべてに強化ガラスで仕切られた立派な観覧用のベンチが併設されていた。下の階には、オフィスや打ち合わせ室の他に銃の保管庫まで用意されていた。おかげで慎一郎は、バイクに積んできた自分の銃をそこへ保管することができた。

外に出ると、セレモニー用のスペースがあった。おそらく、メダルの授与などはそこで行われるのである。そして、お目当てのクレール射撃場は、その奥に広がっていた。

「おお。やってる、やってる！」
「やっていますねえ！」

三上恵造と浅尾義和が、射撃場の方から響いてくる発砲音を聞いて嬉しそうに叫んだ。クレール射撃場では、すでにどこかの代表選手が練習をしているようであった。ドイツと地続きの近隣国の選手達は、地の利を活かして、試合会場に慣れるための練習に早いうちから来ているのだ。

射撃台では三人の西洋人が練習を行っていた。発砲音から察するに、三人とも相当の腕前のようであった。

「かなりお上手ですね。一体どこの国の選手でしょうか？」

義和は、すでに興味津々であった。

「おそらくドイツ近隣の国の選手だろうが、射撃が終わればすぐにわかるよ。彼らも僕達と同じパスを胸に付けているはずだ。そこには国名も書いてあるからね」

「ああ、なるほど。これか……」

則夫に説明され、義和は自分のパスを見て納得した。

パスには日の丸の国旗マークと共にJAPANと記入されている。

三十分ほど経って、射撃台の三人が練習を終えて休憩に入った。彼らはスポーツタオルで汗を拭くと、ベンチわきに設置されている大型のアイソボックスからコーラを取り出して飲み始めた。一時的な休憩で、三人ともまだ練習は続けるようだった。それは、銃を片付けずに、機関部を開けたまま専用台座に立て掛けていることから判断できた。

「今が、チャンスだ！」

義和は、すかさずパスの国籍を確認しようとベンチに座って談笑する三人に近づいて行った。
かなり近づかないと、彼らの胸のあたりにぶら下がる通行パスの内容がよく見えなかつた。

た。そのうちに、ベンチの三人が、じろじろと自分達の方を見る若い東洋人の存在に気付いた。

「何だい、君。サインでも欲しいのかい？」

三人のうちの一人が、笑いながら義和に声をかけてきた。

それに釣られて他の二人も笑った。勿論、ジョークだった。その言語は英語ではなく、かけられた言葉の意味は分からなかったが、その三人の陽気な物腰に安心して、義和は声をかけることにした。

「あ、あの…。練習中にすみません」

義和は一応英語で話してみたが、三人に通じたのは「ソーリー」すみません」の部分だけのようであった。だが、彼らは快く応じてくれた。やはり三人とも、気さくだった。

そして、彼らのパスの文字が判別できた時、義和は満面の笑みを浮かべながら思わず叫んだ。

「やったー、イタリアだ！」

義和が叫んだのも無理はなかった。最も見てみたい相手だったからだ。

国旗の絵柄は、赤、白、緑の三色。そして、ITALYと記されていた。イタリアの代表になることは、オリンピックに出場することよりも大変だと言われているのだ。無論、今回のミュンヘン大会においても、メダルの最有力候補と言われていた。言うまでもなく、彼らは義和にとっては雲の上の存在であり、憧れの選手達であった。そして、言葉には出さなくとも、その反応だけで義和の心境は三人に充分すぎるほど伝わっていた。

「まあ、座れよ」

別の一人が、アイスボックスからコーラを取り出して、ボックス脇の金具で栓を抜いて義和に手渡した。

「サンキュー！」

再び義和は、英語で礼を言った。勿論、万国共通のその単語も通じる。

「ほう。日本人か？」

最初に声をかけた男が、義和のパスを見て訊いてきた。

「はい、そうです」

さすがにその程度の会話は理解し合えた。

だが、残念ながらそこまでだった。

「君もクレール射撃の選手なのかい？」

三人の中で一人だけ若い男がそう尋ねたところで、義和はその言葉が理解できずに返答に詰まってしまった。

「いや、選手ではありません。ただの見学者ですよ」

四人の背後から、流暢なイタリア語で助け舟が入った。

慎一郎だった。

「ほう、君も日本人なのか。そうは見えないがな？」

慎一郎のパスの国籍を見て、最初の男が驚いたように訊いた。

「ええ、日本人です。はじめまして、近衛慎一郎です」

慎一郎は、最初の男に手を差し出して丁重に名乗った。

「やあ、アンジェロ・スカルゾンだ」

スカルゾンが握手で応えた。

「チャンピオン。お目にかかれて、光栄です」

慎一郎は礼を表した。

世界チャンピオンである彼の名前は勿論よく知っていたが、会うのはこれが初めてであった。

「近衛。彼がシルヴェーノ・バサグーニだ」

スカルゾンが、一人目を紹介した。

「あなたが、あの有名な…。はじめまして。お会いできて光栄です」

「やあ、よろしく！」

やはり、敬意を表しながらバサグーニと握手を交わす。

陽気な彼も、本国では有名な選手であった。

「それから、彼がルキアーノ・ジオヴァネッティだ」

スカルゾンが、もう一人の若者を紹介した。

「大変失礼な物言いです、高名なお二人に対して、あなたの名前は初めて耳にします」
慎一郎がストレートに疑問をぶつけると、スカルゾンが頷きながら本人に代わって説明した。

「うん、それもそのはずだ。彼は内務省のフィアンメ・オーロ（体育部局）の推薦で参加している。一応、補欠要員の扱いだ。今後の経験のために今回のナショナルチームに加わってもらっている。いずれは私の跡を継ぐことになる逸材だよ」

フィアンメ・オーロとは、内務省所属の国家警察の中の機関だ。イタリアでは、国家警察の中に体育部局があり、オリンピックでも数多くのメダルを獲得していた。つまり、彼は射撃競技におけるエリート中のエリートなのだ。

「それは、大変失礼をしました。改めまして、近衛です」

「ははは…。とんでもない。ジオヴァネッティです」

二人の若者は笑顔で、固い握手を交わした。

「遠い異国の地にも、我々の名前を知っている人間がいるとは実に嬉しいもんだ」

スカルゾンが嬉しそうに言い、他の二人も笑顔で頷いた。

「この浅尾の方は、おっしゃる通り日本から来たのですが、私の方は、実はブレスシアに住んでいます」

「なんだ、そうだったのか。そうなると、やはり銃関係か？」

「はい、ファーマス社におります」

「おお、ファーマスカ。凄いな、我が国の誇る最高の銃工房だ」

「はい、誇りに思っています。毎日、最高の勉強をさせていただいております」

「ならば、近衛。君は我々の仲間だ」

慎一郎の真摯な態度はスカルズンを大いに喜ばせた。

そのまま五人の会話が弾んだ。一年間の滞在で、慎一郎は完璧なイタリア語の会話をマスターしていた。マリエッタのおかげだった。

しばらくして、場に慣れてくると義和が三人に訊ねた。

「ここは素晴らしい射撃場だと思いますが、実際に撃ってみてどうですか？」

その質問を、慎一郎がスカルゾン達に翻訳してやる。

それに対して、スカルゾンから思いがけない答えが返ってきた。

「うん、そうだな。言葉でいうより、君達もそこそこはやるようだから、実際に自分で撃つて見たらどうかね？」

「せっかくの皆さんの貴重な練習時間を、よろしいんですか？」

遠慮がちに訊く義和のその眼は、言葉とは裏腹にギラギラと輝いていた。

「ああ。我々も、そろそろ練習を再開する。君達も一緒に回ればいい。それならいいだろう。ちやうど五人になるし、その方が我々も都合がいい。どうかね、諸君？」

「ああ、そいつは名案だ」

「いいんじゃないですか」

バサグーニ達も、喜んで賛成してくれた。

クレー射撃競技は、決勝などの場合を除いては、通常、五人で一一緒に射撃を行うことがほとんどである。正式な射撃場には五カ所の射撃台が並んでいる。五人の競技者は、一回撃つごとに時計回りに隣の台へ移動して撃つのだ。つまり、一周すると五回撃つことになり、それを五回繰り返すと一ラウンド消化したことになる。すなわち、一ラウンドは二十五点満点ということになるのだ。

スカルゾンが言うように、ちやうど五人でプレイすれば、実戦と同じ感覚で練習をすることができるようになる。バサグーニ達が「名案だ」と言ったのは、そういうことからであった。

「浅尾、さっきの設定を見ていてどうだった。大丈夫そうか？」

念のために、慎一郎が義和に訊ねた。

慎一郎本人は大丈夫だとして、内気な義和がこの状況の中で平常心で自分の射撃ができるのかを確認する必要があった。彼が普段どおりに撃ってくれば、彼らにとっては最高の練習相手になるはずだ。いや、それ以上かもしれない。だが、力みすぎたり、あがってしまったりすると、彼らの練習の足を引っ張ることになってしまう恐れがあった。

「ええ、大丈夫です。問題ありません」

力むわけでもなく、義和はさらりと云ってのけた。

慎一郎同様、義和の方もこのオリピック用の設定のレベルには、特別に凄いなと思うような印象は持っていなかった。

「うん、そうだろうと思った。よし、では、引き受けるでしょう」

「はい！」

嬉しそうに返事をする義和に、気負いは感じられなかった。純粹に、世界チャンピオン達と一緒に撃てることを喜んでいようであった。これならば大丈夫だろうと慎一郎は判断した。

「チャンピオン。喜んで一緒にします」

慎一郎が、スカルゾンに答えた。

「うん。では、始めるとしよう」

「僕は、ロッカーから自分の銃をとってきますので、用意をしてください」

慎一郎が、クラブハウスの保管庫に向かった。

既に、三上親子達の姿はクレー射撃場の周辺にはなかった。どうやら、他の施設の方へ移動しているようだった。恵造の方は勿論問題ないが、できれば則夫には自分と義和が射

撃をしている姿を見せたくなかったで、その方が好都合であった。日本国内では、法的には、二人はまだ銃を撃つことはできないことになっているからだ。

慎一郎が自分の銃を持って射撃場に戻り準備を始めると、若いジオヴァネッティが歩み寄ってきた。

「とても美しい銃だね。どこのメーカーのものなんだ？」

「ああ、美しいだろう。エミリオ・リッチーニの作品だよ」

「リッチーニ？ イタリアの銃のようだが聞いたことがないな」

「ははは…、それもそのはずだ。まだ、販売ラインには乗せていないからね。だけど、いずれ近いうちに知ることになると思うよ。美しいだけじゃなくて、性能の方も申し分ないんだ」

「そうなんだ…。よかったら、ちょっと持たせてもらってもいいか？」

「ああ、勿論いいよ」

銃を受け取ったジオヴァネッティは、数回、構えては撃つ姿勢を繰り返した。そのあと、機関部を開いてじっと中の様子を伺う。銃身を覗いたり、グリップを何度も握ってみたりする。

「この銃の製作者…、ええと、リッチーニは、ひよっとして、近衛の知り合いかい？」

「ああ。僕のパートナーだよ。まだ年は若いがおそらくブレシアでも一、二を争う銃職人だと思う」

「やはり、そうか。もしよかったら、今度、その彼を紹介してもらえないか？ 僕は、普段は警察本部の所属だから、ローマの方にいるんだが、実家はブレシアの隣のミラノにあるんだ。だからというわけではないが、できればすぐにでも会いたい！」

ミラノはブレシアの真西に位置しており、距離にして七十キロ足らずの近さであった。

「ははは…。君は、この銃が気に入ったのか？」

「うん、とても…。何か惹きつけられるものがある」

「撃たなくてもわかるのか？」

「見て、触って、だいたいの見当がつく。これは素晴らしい銃だ。ただ、できれば…」

ジオヴァネッティが、何を言いたいのかは分かっていた。

「いいよ。あとで撃ってみても」

聞かれる前に、慎一郎はその許可を出してあげた。

「本当か？ ありがたい！」

ジオヴァネッティが、嬉しそうに言った。

それは、車の愛好者によく似ていた。人によっては、自分の愛車を他人に触られたり運転されるのを極端に嫌う者がいる。銃についても同じ感覚だった。自分の銃を他人に触らせたり、撃たせたりすることを許さないタイプの人間も多々いるのだ。慎一郎には、そういうこだわりはなかった。

「あ、あの…、二人だけでずるいですよ。僕にも、撃たせて下さいね」

自分の存在を忘れないでくれとばかりに、義和が二人の話に割り込んできた。

言葉の意味がわからなくても、さすがに慎一郎達のやり取りを見ていれば、どういう話をしているかは理解できていた。

「ははは…、勿論だよ！」

慎一郎が笑い、それをジオヴァネットイに伝えてやると、彼も大笑いした。

「おい、その若者達よ。趣味のお話は後にして、そろそろ、おじさん達の相手をしてくれ！」

バサグーニが、笑顔で声をかけて来た。

「近衛。弾は、そこにあるのを使いなさい。ブレシアで働く君にも使う権利がある」

スカルゾンが大きなダンボール箱に詰まっている散弾を指差しながら、イタリア流のジョークを交えて言った。

「イタリアの射撃協会からの支給品だ。遠慮なく、好きだけ使うといい。その一部には君の払った税金も含まれているのだからな。ははは……」

「ありがとうございます。では、遠慮なく」

慎一郎がそう礼を言うのと、

「ははは……。聞いただろう、近衛。「好きだけ」使っていないんだからな」

と、バサグーニが笑いながら言うのと、イタリア側の一同が笑った。

それは、上手ではない人間は、遠慮なく弾をたくさん消費していいのだというクレイ射撃選手一流のジョークであった。

「では、お言葉に甘えて、二十五、六発ほどお借りするとしましょう」

そう慎一郎が切り返すと、

「ははは……。これは一本とられたな。気に入ったぞ、近衛。おまえはジョークの方も完全にイタリア人だよ」

と、スカルゾン達はまた大笑いした。

一ラウンドは二十五点満点であるから、二十五、六発でいいと言った慎一郎の返答は、この世界最高レベルの競技場の設定条件の中で、ほとんどパーフェクト射撃を宣言することを意味していたからだ。それがジョークであれば、最高の返し方であったわけだ。

「近衛さん。皆は何で大笑いしているのですか？」

「まあ、言ってみれば、イタリア流のジョークの応酬ってやつだよ。僕はまじめに答えたつもりだったんだけど。結果的には、そうなってしまったようだ」

ことのくだりの説明を慎一郎から受けた義和が、それを聞いて笑いだした。

イタリアの三人は、自分達のジョークが日本の若者にも伝わったと思ひ、笑いながら見守っていた。だが、義和は一連のジョークに対して笑ったわけではなかった。慎一郎の返答が、ジョークではなくて真実だということを、後にイタリアの三人が思い知った時の驚く様子を想像して笑ったのだ。

そして、三十分後にそれは現実のものとなった。

十二・受賞の言葉

一か月後の週末――

ドウカティGT750が、イドロ湖畔の道路沿いにある砂利道に停めてあった。

砂利道は、奥行きが十メートル程度しかなく、そこから森林になる。さほど距離のない森林帯を抜けるとすぐにあたりは開け、湖が広がる。

湖畔の平地には、いつものように赤と白のチェック柄の大きなビニールシートが敷かれ、その上で慎一郎が寝そべっていた。その傍らに座るマリエッタが、その日の新聞を彼に読み聞かせていた。

ロンバルディア県ブレシアは、すぐ北側にあるアルプス山系に抱かれている。従って、周辺にはいくつもの湖が点在する。一番大きな湖はガルダ湖で、このあたりの州立公園の名称の由来にもなっている。イドロ湖は、そのすぐ近くにあるガルダ湖の百分の一にも満たないような小さな湖だった。だが、二人はこの湖をととても気に入っていた。イタリアでの生活が一年以上経ち、日常の会話の方は地元民とほとんど遜色がないほどに上達していた。慎一郎であったが、読み書きの方はまだまだ完全とは言えず、マリエッタの力を借りなければならなかった。

この湖畔に來始めた時は、大学のテキストなどを読んで教えてもらうことが多かったが、ミュンヘン・オリンピックの開催が近づくにつれ、次第にその関連の新聞や雑誌を読み聞かせてもらうことが多くなっていった。不幸なテロ事件のおかげで日程に遅れをとりながらも、オリンピックはいよいよ終盤を迎えていた。

隣国で行われているオリンピックということもあって、イタリア国内の新聞は、スポーツ専門誌にとどまらず、一般誌においても連日のように紙面の大半がオリンピック関連に割かれていた。その中でも、クレー射撃関連はとりわけ大きく扱われていた。イタリア選手団が、参加競技全般ではこれといって目ぼしい成果のない中であって、クレー射撃だけはメダルの最有力候補だったからだ。連日、紙面の多くが順調に勝ち進むクレー射撃競技の模様で割かれていた。そして、ついに昨日その決勝ラウンドが行われたのだ。

はたして結果は、下馬評通りイタリア勢が圧倒的な強さをみせ、金と銅を獲得した。

優勝したのは、やはりアンジェロ・スカルゾンだった。二位は、フランスのミッシェル・カレーガで、三位にはシルヴェーノ・バサグーニが入った。この偉業に昨日からイタリア中が熱狂し、お祭り騒ぎになっていた。銃の町であるこのブレシアも、言うまでもなく街中が祝勝ムードで沸きかえっていた。

「それにしても、二人とも立派だわ。国中から優勝候補と期待されて、相当のプレッシャーだったでしょうに……。その中で、ちゃんと期待に応えたんだもの。ね、慎一郎。そう思うでしょう？」

その記事を読むマリエッタの声も、普段より弾んでいるようだった。

「うん、そうだな」

対して慎一郎の方は、特段変わった風でもなく、普段のように淡白な調子で返事をしていた。

「もう、慎一郎ったら。いつも、その調子なんだから。あなたの仕事に関連する話題ですよ？」

と、不平を言いつつも、彼女はそういう慎一郎が大好きだった。

一年以上のほとんど毎日と一緒に過ごしてきて、彼の性格はよくわかっていった。寡黙だが、決して口下手というわけではない。物事は、はっきり言うタイプだ。かといって、不作法でもない。わきまえるべきはわきまえる。つまり、不必要なことは言わずに、物事の本質のみをきつちりと伝えるタイプなのだ。それは、必要以上に何かと感動の形容詞をつけたがるイタリアの男達にはない魅力だった。

「冷めないうちに、いただきましょうか」

そう言って、マリエッタが持ってきた籐のバスケットから何個かの包みを取り出して、慎一郎に手渡した。彼女の手造りのミートパイだった。

「大丈夫。まだ充分温かいよ」

慎一郎は、さっそく大好物のそれをパクついた。

マリエッタが焼くミートパイは、彼がイタリアに来て最も美味しいと思った食べ物であった。そして、それは一年たった今でも変わらない。

「はい、これも」

マリエッタは、キャンティ・ワインをグラスに注いで慎一郎に差し出す。

それから、やっと自分も食べ始めた。

「でも、何だか変だわ…」

パイを食べながら、新聞記事の続きを読み始めた彼女が、ぼつんと呟いた。

「どうした？」

「今、受賞インタビューのくだりを読んでいるのだけど、その内容がそれまでの彼らの様子とはかなり違うのよ」

「どういう風に？」

珍しく慎一郎が、その内容に興味を示した。

「オリンピックが始まるまでの彼らは、こつちが心配するぐらい明るく、堂々と、自身に満ち溢れたコメントを繰り返していたのよ。散々ジョークなんかも交えて。でも…」

「でも？」

「いざ受賞して、その感想の段になったとたん、急に控えめな発言に終始しているのよ。本来の彼らだったら、もっと派手に喜びを表現していいはずなのに…」

「そのところを、読んでみてくれるか？」

「ええ…」

マリエッタは、記事の内容を読んだ。

「その偉業を見事に成し遂げ、重圧から解放されたはずなのに、二人のメダリストは会見中ほとんど笑顔らしい笑顔を見せなかった。更に、そのコメントも以前のような派手さや明るさは影を潜め、短く、当たり障りのないものであった。おそらく、大会中に起こったテロで亡くなったイスラエルチームへの弔意と配慮なのであろう。しかし、それを差し引いて考えてみても、王者スカルゾンの最後の言葉は、それまでの彼のものと比べてあまりにも謙虚であった。彼はこう語った。確かに我々は、あの試合には勝った。その結果、メダルを獲得することができた。だが、それがそのまま世界のトップ3として認められていいのかどうかは疑問だ。たまたま今回、競技に参加している選手の中でのトップ3にすぎないのだ。我々は今回の結果に甘んずることなく、更に研鑽していかなければならない…」

読み終わった彼女は、新聞から目を離して慎一郎に向けた。

「ね、変でしょう。どう思う？」

大きな黒い瞳が、彼の答えを待っていた。

「マリエッタ、こつちへおいで」

新聞を置いてマリエッタが隣に座ると、慎一郎は、彼女の美しい薄茶色の髪の毛を優しく撫でながら言った。

「これだけは言える。スカルズンは、真に偉大なチャンピオンなんだよ。僕は、彼のその謙虚な姿勢に敬意を表する」

マリエッタのその疑問にきちんと答えてやれる者、すなわちスカルズン達の発言の真意を理解できる者は、世界広しとはいえ自分と浅尾義和の二人だけだった。だが、慎一郎はその発言の理由を彼女には伏せておこうと思った。それが、偉大なチャンピオンへの敬意の払い方であると彼なりに思った。

十三・後日談

一週間後―。

オリンピックでの優勝騒ぎが一段落し、ブレシアの町は普段の落ち着きを取り戻していた。

その夜、市内のパブ「ラ・グロッタ」には、慎一郎とリッチーニ兄妹といういつもの常連の三人に加えて、もう一人ゲストが同席していた。ミラノから遊びに来たルキアーノ・ジオヴァネッティであった。

彼自身、メダル獲得者のスカルズン達ほどではないにせよ、大会後は、連日連夜の祝勝会やイベント攻勢に合つて、息もつけない程の忙しい毎日を送っていた。そんな最中、地元のみらノで行われた祝勝会にからめて時間を工面し、慎一郎達に会いにやって来たのだった。

明るいうちに、ファーマス社の工房を訪れたジオヴァネッティは、慎一郎の予想通り、エミリオともすぐに意気投合した。慎一郎は、あえてジオヴァネッティの素姓をエミリオには明かさずに、自分の友達として紹介していた。彼がこの間の優勝チームの一員だということを明かしてしまえば、会社中が大騒ぎになってしまうからだ。幸い、毎日あらゆるマスコミ媒体に登場するスカルズンやバサグーニと比べると、補助要員の彼はほとんど顔を知られておらず、社内でも彼の正体に気づく者は誰もいなかった。

エミリオにとっては、慎一郎の友人と言うだけで充分で、他の肩書は不要だった。そして、自然な流れでこの店に来ていた。

「ええっ、何だつて？ 君は、この間のオリンピックのチームの一員だったのか？」

エミリオが、食べていた生ハムを喉に詰まらせそうになった。

勿論、マリエッタもいきなり明かされたジオヴァネッティの正体に驚いた。

「うん。とはいっても、補助要員だから個人戦には出場しなかったけどね」

「どうりで、さっきの質問の内容のレベルが高かったわけだ。ただ者ではないと感じていたが、まさか、優勝したナショナルチームのメンバーだったとはね…」

「君の方こそ、素晴らしい銃職人だよ。慎一郎から聞いていた通りだった。無理してでも、ブレシアに来て本当によかったよ」

「それは、素直にありがとう、と言っておく。だが、こいつからは、君の正体のことは何も聞いていなかった」

エミリオが慎一郎を指差して、不満げに言った。

「いや、近衛が悪いんじゃないよ。ファーマスの社内にいるうちは、騒ぎになると君に迷

惑がかかるから黙ってしようということになったんだよ」

ジオヴァネッティが、かばうように説明した。

「まあ、そういうことだ、エミリオ。すまなかった」

慎一郎が、笑いながら陳謝した。

「そう言えば、近衛。スカルゾン達から伝言を預かっている」

そのやりとりから、ジオヴァネッティが思い出したように言った。

「君に会いに行くと言ったら、自分達は、まだしばらくは優勝の関係のイベントなどで忙しくて会えないから、僕から代わりに必ず渡してくれということだ」

そう言いながら、自分のカバンの中から何かの包みを取り出そうとした。

「ええっ？ スカルゾンって、まさか、あのアンジエロ・スカルゾンのこと？」

エミリオが焦ったようにジオヴァネッティに訊いた。

「うん、そうだよ。チームのキャプテンのスカルゾンとバサグーニ達のことだよ」

「慎一郎は、あの二人とも顔見知りなのか？」

エミリオが驚きながら、再確認した。

「勿論さ。ちよつと待てよ。君達は、それも知らないのかい？」

拍子抜けしたようにジオヴァネッティが言って、カバンに入れた手を止めた。

「おまえは聞いていたのか？」

エミリオは、慎一郎本人ではなくマリエッタの顔を見た。

「いいえ、お兄さん。それも、私も始めて聞くわ」

彼女も、驚いて否定した。

「そんなに大げさな話ではないよ。顔見知りとは言っても、ミュンヘンで一度会ったきりだよ」

わざわざ言う程のことでもない、といった感じで慎一郎本人が説明した。

「なんだ、近衛。君は、あの時のことをパートナーにも恋人にも話していないのか？」

それには、ジオヴァネッティも驚いた。

「話す程のことでもないだろう」

と、慎一郎が軽い調子で答えると、

「とんでもない。大ありだよ。だって、彼らがメダルを取れた理由の一つは、大会直前に君と出会えたからだぞ」

と、ジオヴァネッティがきっぱり言い切った。

「それは、あまりにもオーバーだろう？」

慎一郎は、あくまでも平然としている。

「いや。君は謙遜してそう言うのかもしれないが、決してオーバーな表現ではないんだ」
ジオヴァネッティが力説した。

「何か、随分と凄そうな話になってきたな……。ジオ、その大会直前に、慎一郎と君達との間にいったい何があったというんだ？」

その性格からして、直接慎一郎本人からは事の詳細が聞き出せないだろうということ承知しているエミリオは、ジオヴァネッティの方に説明を求めた。

彼は、取り出そうとしていた包みをいったんカバンの中に戻すと、きちんと座りなおし、二人に向き合った。

「二人には、きちんと話しておこう」

その態度から、これから話すことの内容が尋常でないということが伝わって来る。

「ジオ。その話は、わざわざしなくてもいいだろう」

「だめだよ、近衛。これは、きちんと話しておくべきだ」

慎一郎が止めるのをやりすごして、ジオヴァネッティは、その時の出来事をリッチーニ兄妹に丁寧に説明し始めた。

「あれはオリンピック本番の一週間くらい前のことだった。ミュンヘンの競技会場で僕とスカルゾン達が練習をしている時に、見学に来ていた近衛とひよんなことから知り合ったんだ。きっかけは、一緒に来ていた彼の友人の浅尾だった…」

十四・真相

三分ほどかけて出来事の導入部を話すと、ジオヴァネッティが喉を潤す為にいったんワイングラスを口にした。

「…なるほど。それで、五人で一緒に撃つことになったわけだ。で、その射撃練習の結果はどうだったんだい？」

「続きを話して、ジオ！」

エミリオとマリエッタが、早くその続きを聞きたがった。

「今は、現実して受け入れられるが、その時の僕達はとてもそうではなかった…」

ジオヴァネッティが、ワイングラスをテーブルに戻して続きを話し始めた。

「二度目の射撃では、トップはスカルゾンだった。そして、近衛は二番手だった。それから、バサグーニ、僕、最後に浅尾という順番だった。近衛と浅尾の高得点には驚かされたが、この時はまだ、ビギナーズラックという可能性も考えられたし、僕達の射撃への意識も完全な本気モードではないという説明がついた。まだ、笑う余裕もあった。苦笑いではあったけどね…」

ジオヴァネッティは、その時のことを思い浮かべるように話を続けた。

「だが、二度目の結果が出た時には、その余裕は打ち消されてしまった。トップは近衛だった。そして、スカルゾンは二番手だった。それから、バサグーニ、浅尾、最後に僕という順番に変わったんだ。その時点で、僕達から完全に笑いが消えた。それからは、もはや練習の域ではなかったよ。僕達は正式な実戦の、いや、ひよつとするとそれ以上の真剣さで三度目に入って行った…」

ジオヴァネッティが、再びワイングラスを口にした。話の内容に、できるだけ正確を期そうと、頭の中を整理しているようだった。

「三度目は、皆完全に真剣だった。それなのに…」

話を再開した彼は、すぐに言葉を詰まらせた。

「それなのに、トップはまた慎一郎だった？」

エミリオが、彼の代わりに言った。

「ああ、そうだ。また、近衛だった。しかも、その次の回もだ…」

そこまで言って、ジオヴァネッティは、また言葉を詰まらせた。その彼の様子に、その

時にイタリアチームが受けた衝撃の大きさが窺えた。

「やっぱりね」

エミリオが呟いた。

「やっぱりねって…。君は、その結果に驚かないのかい？」

予想に反して、その結果を当然のように受け入れているエミリオの反応に、ジオヴァネッティは驚いて訊いた。

「うん。申し訳ないが、驚いていない。当然とまでは言わないが、慎一郎の実力を考えれば、それは驚くほどの結果ではないよ」

「本当か？」

「ああ…。これはあくまでも僕の意見として聞いてもらいたいのだが、慎一郎の実力はその時の結果通りだと思う。言いづらいが、まちがいに君達よりも上だ。だから、射撃を始めるあの時に、使う弾は二十五、六発ほどで充分だと慎一郎が言ったのは、決してジョークではなかったんだよ」

「やはり、そうなのか…」

もはや、ジオヴァネッティは、そのことを認めざるを得なかった。

それは主観的に考えても、自分やスカルゾン達も認めていたことであつた。あの射撃の後、スカルゾンは言っていた。あのまま試合を続けていても、ずっと慎一郎が勝ち続けていただろうと。バサグーニも同様の意見だつた。そして今、エミリオによつて客観的にもそれが認められてしまった。

「それから、今話を聞いて、慎一郎がその時の出来事を誰にも話さなかつた理由が、今わかつたよ」

「何故なんだ、教えてくれ」

ジオヴァネッティは、事のすべてが知りたくなつていた。

「もしその時、慎一郎がスカルゾンに勝っていないければ、ひよつとしたら僕や妹にその時の話をしたかもしれない。だが、彼を負かしてしまったから、黙つていたんだ」

「言っている意味が、よくわからないが…？」

「始めて顔を合わせた時、スカルゾンは、まだ見ず知らずの慎一郎達を、温かく迎え入れてくれた。オリンピック直前の練習中ということを考えれば、本来なら挨拶はおろか無視されても仕方がない状況だ。だが、彼は分け隔てなく接してくれた。だから、慎一郎は、そんな心の広いチャンピオンの人間性に敬意を払つたんだと思う。おそらくそうだ。間違いない。慎一郎ってのは、そういう奴なんだよ」

自信を持ってエミリオはそう断言し、慎一郎の方を見た。

「ははは…。エミリオ。いくら気心の知れたパートナーだからといって、僕の心情を勝手に解説しないでくださいよ」

やっと口を開いた慎一郎は、そう言いながらも、エミリオのその説明を否定はしなかつた。

二人のそのやりとりを聞いていたマリエッタも、そうに違いないと確信を持っていた。近衛慎一郎という男は、そういう男なのだ。そして、彼女は自分の愛した男の人間としての奥深さ、大きさを改めて知つた。

「もう、慎一郎ったら。私にまで隠して」

心の中とは裏腹に、ふくれっ面をして見せるマリエッタに、慎一郎は笑顔を浮かべて応えていた。

「こちら、そのいい雰囲気のお二人さん。邪魔してすまんが、話はまだ途中だぞ」
ジオヴァネッティがワインを呷ってから、見つめ合う恋人達に言った。

「僕達が彼に驚かされたのは、それだけじゃない。練習が終わって、ある疑問を持っていたスカルゾンが近衛に訊いたんだ。日本人はみんなそんなに凄いのかと。すると、近衛はこう答えた。たまたま自分と浅尾の二人が特別なんだと。だから、スカルゾンはこう訊ねたんだ。ならば何故、君達が日本の代表選手になつていないのか、とね。当然の疑問だ。すると、近衛から平然と帰って来たその答えは驚きだった。直接言ってくれよ、近衛。あの時の一言を」

そう言つて、ジオヴァネッティが、慎一郎の顔を見て本人に答えを促した。

「言えよ、慎一郎」

「ねえ、聞かせてよ」

三人にせきたてられて、慎一郎は渋々と引き受けた。

「チャンピオン。その理由は、至極単純です。日本では、僕達は銃を持つことができないのです。なぜならば、僕達はまだ未成年だからです、つて答えたんだ」

と、その時と同じように淡々とした口調で言った。

「ははは…。なるほど、それは強烈な答えだ」

エミリオが、笑いながら言った。

「君はそうやって笑うかもしれないけど、その時に僕達が受けた衝撃は強烈なんて、そんな生易しいもんじゃなかったさ。世界のトップを自認していた僕達が、コテンパンにやられた相手が何と未成年だったんだからな」

ジオヴァネッティが、少し腹を立てたように言った。

「ははは…。すまん、すまん」

「まあ、いいよ。そんなことがあったものだから、翌日から僕達チームの練習への取り組み方が、それこそガラッと変わったんだ」

「つまり、慎一郎達に刺激を受けて、緩みかかっていた気持ちを引き締めなおしたつてことだな」

「まさに君の言うとおりでだよ、エミリオ。それからの一週間、僕達イタリアチームは人が変わったように一切の甘えを排除して、射撃の練習に集中するようになったんだ。あれ程好きだったマスコミへのサービスも必要最低限にして、それこそ初心者のように緊張感を持って追い込みの練習に打ち込んだんだ。勿論、笑いもジョークも消えたよ。あの陽気な二人からさえもね」

「そうか。それで、最初に君が言った言葉につながるというわけだ。だとすれば、スカルゾン達がメダルを取れたのは慎一郎と出会ったおかげだという話も頷けるな」

「当の本人達も、それが一番わかっていたから、その後のインタビューでも、人が変わったしまったように謙虚になつていたのね」

リッチーニ兄妹は、それぞれに納得していた。

「うん、そういうことだ」

ジオヴァネッティが、大きな仕事をやつと無事にやり終えたかのような安堵感に満ちた

表情で、ワインを呷った。

「ところで、ジオ。そろそろスカルゾンさん達からの伝言とやらを聞かせてくれよ」

そんな彼の様子を見ていた慎一郎が、何事もなかったように訊いた。

「ああ、そういえばそうだった。そもそも、それを話そうと思っただ」

「ははは…、随意分と長い前段になってしまったな」

「まったく。ははは…」

全員が、笑いだした。

理由はともあれ、すべての隠し事から解放され、皆が本来の同じ位置に立ったことへの安堵感もあった。笑い声はしばらく続いた。

「さてと…。それで、やっとこれの出番だ」

そう言っ、ジオヴァネッティが、さっき取り出した包みをカバンの中から取り出した。

「この中に、二人からのメッセージカードが入っている」

包みの中から、一枚目のカードを取り出す。

「これは、スカルゾンのだ。僕が読むのも何かおかしいな…」

「じゃあ、私が読むわ」

マリエッタが、そのカードを受け取って読み始めた。

「親愛なる、近衛へ。正直に言う。もし、あの時君と会っていなければ、おそらく我々はメダルを取れなかっただろう。君に負かされたことで、慢心から目が覚め、気を引き締めることができたのだ。願わくば、これからもずっとイタリアで銃の勉強を続けて欲しい。

そして、もし可能ならば、正式なイタリア国民になり、我々のチームの一員になって欲しい。待っている。A・スカルゾン」

マリエッタがカードを読み終わると、ジオヴァネッティが、包みの中から何かを取り出した。

それを見て、彼女が叫んだ。

「まあ、素敵。オリンピックの時に着ていたのと同じだわ！」

それはオリンピックの時のイタリアチームのユニフォームだった。

「ははは…。慎一郎も、スカルゾンに相当惚れ込まれたもんだな」

それには、エミリオも驚いた。

「ええ、本当に。でも、一番気持ち易いプレゼントだわ」

マリエッタが、自分のことのように喜んだ。

「二人が言う通り、スカルゾンは慎一郎にぞっこんだよ。正直、僕は嫉妬している」

ジオヴァネッティが、真顔で言った。

「わかった、わかった。…で、バサグーニの方は？」

慎一郎に言われて、ジオヴァネッティが、包みの中からも一枚のカードを取り出す。

「よし、今度は僕が読むとしよう」

それを、エミリオが受け取った。

「親愛なる、近衛へ。次回は絶対に負けないぞ。ただし…」

そこまで読んで、エミリオが笑い始めた。

「お兄さん。自分だけ笑ってないで、ちゃんと最後まで読んでよ」

「ははは…。すまん、すまん…」
マリエッタに謝りながら、エミリオが続きの文章を読んだ。

「…ただし、次にやる時は、自分の弾は自分で持つてこい。」「二十五、六発ほどお借りします」というあの言葉は、もう二度と聞きたくないからな。S・バサグーニ」
今度は、その場の全員が大笑いになった。

十五・思い出の地で

昭和五十三年、春―。

大津港から山側に入った溪流の河川敷で、工藤辰夫と浅尾義和が大量に買い込んだバーベキュー用の食材と格闘していた。

よりによって、普段は料理などまったくできなかった二人が調理の係りを担当しているのだ。バーベキューをやるうと言いついた本人である手前、辰夫は必死だった。子分格の義和を従えて、鉄板と網焼の前で悪戦苦闘している。

「大丈夫か、工藤。手伝おうか？」

二人のあまりの不器用ぶりを見かねて、三上恵造が声をかける。

「まかせておけ。これも、観光業の勉強のうちだ。これからの時代、こういうキャンプ風に、屋外で焼いて皆で食べるのが流行っていくんだ。アウト・ドアってんだ。だから、俺もこうやって体で知っておく必要があるのさ。それに、俺は子供の頃から、祭りの的屋の仕事ぶりを見て育っているからな。こんなのは朝飯前さ」

そう言いながら、辰夫は大きな鉄板の上で、焼きそばを作り始める。

義和は、隣の網焼きの方の担当で、串に刺した肉や野菜を炙っている。

「ははは…。なかなか上手いじゃないか、義和。おまえも、普段は自分では何もできない典型的なお坊ちゃまだからな。今日は、料理のいい練習になるだろう？」

「はい、勉強になります！」

義和が、嬉しそうに軍手をはめた手で、額の汗をぬぐう。

「おいおい、辰夫。浅尾君まで巻き込んで。今日は彼が主役のはずだろう」

マリエッタと並んで折り畳みイスに座る慎一郎が、缶ビールを片手に笑いながら言う。

「そうだよ。今日は浅尾君の優勝のお祝い会だぞ」

恵造も追隨する。

義和は、先日のクレ―射撃の日本選手権を初出場ながら、二十三歳の史上最年少で優勝を飾っていた。

「確かに、最初はいいつのお祝いと言うことで計画していたが、まさか慎ちゃんがイタリヤから駆けつけてくれるとは思ってもみなかったからな。だから、今日の主役は、慎ちゃんと奥さんのマリエッタさんに変更したんだよ。それでいいんだよな、義和？」

「はい、勿論です！」

「がはは…。よしよし！」

たとえ、義和がクレ―射撃の日本チャンピオンであろうがなかるうが、この二人の主従関係は高校生時代から不変であった。

「辰夫サン。アリガトウ、ゴザイマス」

その辰夫の話の通訳を慎一郎から受けて、マリエッタが日本語で礼の言葉を返した。

「わははは…、とんでもない！」

焼きそばの調理用のヘラを掲げて、辰夫がそれに応えた。

彼は、マリエッタのことをとても気に入っているようだった。

「辰夫さんは気持ちのいい人ね。でも、日本チャンピオンの浅尾さんは、本当に辰夫さんの子分なの？」

マリエッタの素朴な質問を聞いて、慎一郎が笑いながらそれを向かいに座る恵造に話した。

「はははは…。本当ですよ。あいつは昔、チェリオ一本で義和を子分にしたんです」

恵造が笑いながら言った。

「チェリオ？ イタリア語ですね？」

マリエッタは、ローマの有名な名所である七丘の一つがその名前だと説明した。

「はははは…、それは、おもしろい偶然ですね。でも、僕の言ったチェリオは日本の清涼飲料水のことです」

そう言って、恵造が当時のことを説明しはじめた。

義和が射撃で行き詰って悩んでいた時に、一番優しく励ましてやったのが辰夫だったことを。慎一郎が、的確にそれらを彼女に通訳する。

「へえー、そうだったのですか。見かけとは違って、辰夫さんは優しい人なんです」

彼女が、辰夫達の方を見て言った。

「はははは…。確かに、それは認めます。熊のような見かけですが、本質は優しい奴なんです。でも、マリエッタさん、今褒めて言ったことを絶対にあいつの前で言ってはダメですよ」

「何故ですか？」

「あいつは、想像できないくらい調子に乗りますから。な、近衛」

「はははは…、まったく」

「では、そうしましょう。ほほほ…」

三人が楽しそうに笑っていると、レオが慎一郎に向かってワンと吠えた。自分の存在も忘れないでくれという吠え方であった。

「よしよし。勿論、おまえのことは忘れていないぞ」

言い聞かすように慎一郎が、レオの体を撫でてやった。

マリエッタと並んで座る慎一郎の傍らには、レオが寄り添うように座っていた。レオは、五年ぶりに再会した主人のそばから、片時も離れようとしなかった。慎一郎は、何度もレオの体を撫でてやっていた。その度に、レオは、ちぎれそうなほどにしっぽを振って応えていた。彼はこの愛犬に、五年にも渡って不憫な思いをさせてしまったことを深く悔やんでいた。そして、今度こそはイタリアと一緒に連れて帰ろうと考えていた。それには、マリエッタも賛成してくれていた。長時間の飛行機の貨物室さえ我慢してくれば、レオにとっての新天地になるブレシアは、気候も風土もこの大津港の町とほとんど一緒なので、気に入ってくれるだろう。

レオをイタリアに連れて行くことには、慎一郎にとって別の側面でも嬉しいことであっ

た。狩猟が格段に充実するようになるからだ。ブレシアでの狩猟には、ずっと不満足を強いられて来ていた。パートナーになる犬がどれも優秀とは言えなかったからだ。山の中の狩猟では、「二に犬」と言われるほど、組むべき犬が重要である。そう考えると、レオがパートナーになれば、それ以上に心強いことはなかった。十歳を超えるレオは、猟犬としてはすでに峠を越えているが、並外れた捕獲能力は未だ衰えていなかった。

「レオは、やっぱり慎ちゃんが一番なんだな。ちよっぴり、妬けちまうぜ。わははは！」
宴の中心にいるのは、いつもと同じように辰夫だった。

一年前にイタリアで行われた慎一郎とマリエッタの結婚式の時もそうだった。そして、久しぶりに慎一郎と思い出の地で会えたとあって、この日は特に上機嫌だった。

「慎ちゃん、奥さんに伝えてくれ。近々、隣の千葉県の成田に国際空港ができる。そうなると、わが社もこれからは海外のツアーにも力を入れて行くことになるんだ。勿論、イタリアも候補になっている。だから、もしそうなった時は、現地の手伝いをして欲しいんだ。どうだい？」

観光業に精を出す辰夫は、持ち前の明るさと積極さで順調に客を増やし、会社を成長させていた。慎一郎が、それをマリエッタに通訳してやる。それを聞いた彼女は、何やら自分のお腹を指差しながら、慎一郎に返事をしていた。

慎一郎は、二度、三度それに頷いてから辰夫に答えた。

「すまん、辰夫。申し出はともうれしいが、半年後からは、出産の準備をしなければならぬから、しばらくは受けられないそうさ」

「えっ。出産って、まさか…」

辰夫が、驚く。

マリエッタは、嬉しそうに自分のお腹を撫でながら辰夫に向かって頷いた。

「ありや、まー。本当かよ？」

これには辰夫だけでなく、皆も一様に驚かされた。

「そ、そいつは、めでたい！」

「おめでどう！」

「おめでどうございます！」

皆が、それぞれに祝福の辞を述べた。

「よし。突然ではあったが、とにかく、皆、慎ちゃん夫妻のおめでたを祝って、乾杯という！」

起立した辰夫が、音頭をとり、改めて乾杯となった。

「まったく。義和の優勝の件といい、おめでた続きだな。いや、けっこう、けっこう！」

辰夫は、酒の勢いも手伝ってますます機嫌がよくなっていた。

「それにしても、さすがは慎ちゃんだ。あっちの方も百発百中だな。わははは…！」

「ははは…、確かにそうさ。上手いぞ、工藤！」

恵造も、義和も大笑いした。

「ねえ。皆さん、すごく楽しそうだけど。辰夫さんは、今何を言ったの？」

男達の喜び方が、あまりにも盛り上がっているのを見て、マリエッタが慎一郎に訊ねた。

「ははは…。いわゆる男のジョークってやつだよ」

「ははあー、そういうことね。でもその内容を聞いてみたいわ。そうよねっ、赤ちゃん？」

言いながら、彼女がお腹に向かって話しかけた。

「そういえば、子供の名前は考えているのかい？」

慎一郎は、話題を逸らすのに最適な質問を彼女にした。

「ええ。女の子の方は考えたわ。聞きたい？」

「うん」

「アリッサよ。素敵でしょう？」

「アリッサ…。アリッサ・リッチーニ・近衛、か…。うん、いいね」

「気に入ってくれた？」

「ああ、とてもいい名前だ。でも、もし男の子だったら？」

「男の子だったら、あなたが考えて。日本名がいいわ」

「じゃあ、謙作という名前がいいな」

「ケンサク…。いい響きね。何か、理由があるの？」

「うん、ある。「作」の字は、僕の父の慎作の一字をもらうんだ。謙は、字ではなくて、言葉の響きで決めた。下の作を略して、謙Ⅱケンって皆に呼んでもらえば、世界中の誰でも呼びやすいからね」

「いいアイディアだわ。じゃあ、男の子だったら、その名前にしましょうね。ケンとアリッサ。何だか、男の子と女の子、両方欲しくなっちゃったわ」

マリエッタが、幸せそうにほほ笑んだ。
一年ぶりに集合した旧友達は、陽が傾いて辺りが薄暗くなるまでその場を離れようとしなかった。

身重のアリッサを除いた男達が、それぞれ作業を分担して片づけを始めたのは、かなり暗くなってからであった。

「三上君、手伝いますよ」

川の水で、食器を洗う恵造の所へ義和がやってきた。

「おう、ありがとう。でも、君は料理を作る方をやってもらったから、片付けぐらいは僕がやるよ。それに、日本チャンピオン様に皿洗いをさせちやさないしね。ははは…」

恵造は、冗談で受けようと思って言ったつもりだったが、これに限っては義和はあまり乗ってこなかった。

「三上君の銃のおかげですよ。それに…」

義和は、そう言いかけてため息をついた。

「あれ、どうしたんだい。急に？」

「日本チャンピオンとはいっても、それは選手権に出ていた人の中だけの話ですし…」

「ははは…。何か、どこかで聞いたことのある表現だな」

「はい。以前、ミュンヘン・オリンピックの優勝インタビューの時に、スカルゾンさん達が言っていた言葉です」

「うん、そうだったな」

恵造は、その話をスカルゾン本人からも聞いていた。

五年前のミュンヘンの時は、会場にしながらスカルゾン達とはすれ違いで会うことはできなかった。だが、一年前の慎一郎の結婚式の際にイタリアで顔を合わせていたのだ。その時は、新郎側の友人として親友のジオヴァネッティはもとより、スカルゾンや、バサグ

ーニ、アバルデスコ・バルデイといったイタリア・クレイ射撃界の面々が挙げて列席していた。式後のパーティーでは、日伊のクレイ射撃の関係者同士で、大いに盛り上がったものだった。

「競技の規模こそ違いますが、今の僕はスカルゾンさん達のその気持ちがよくわかります」

「近衛の存在か…？」

恵造が、食器を洗う手を止めて訊いた。

「はい…。五年経つても、近衛さんを越えることはできていません。相変わらず、まだ雲の上の存在です」

「この間の、日本選手権の優勝インタビューでも、君はそんなことを言っていたな」

担当銃メーカーとして義和の試合に同行した恵造は、その時のことを思い出していた。

慎一郎本人から自分の存在を世間に明かさないと固く口止めされている為に、実名こそ出していないかったが、実直な義和はインタビューにそう答えていた。まだまだ足元にも及ばないもつと凄い目標の人がいるので、より精進していきたい、と。

「近衛さんは、何であんなに神業的な射撃ができるのでしょうか？」

義和は、プライドを捨てて思い切って訊いてみた。

もし、その問いに答えられる人間がいるとしたら、恵造以外にはいないと思った。

恵造は、薄暗くなった空を見上げた。そして、ぽつりと言った。

「あいつはな…。あいつは、銃と会話ができるんだ」

「会話…、ですか？」

義和が、聞き直した

「そう。会話ができるんだよ」

そう言つて、義和は向こうで車にバーベキューの機材を積み込む慎一郎の姿に目をやった。彼の周りでは、レオが尻尾を振りながら嬉しそうに走り回っていた。

十六．天才は語る

昭和五十九年、夏―。

アメリカ・ロサンゼルス―。

その試合会場は、ロスのダウンタウンから車で一時間ほど行ったところにあつた。

ルキアーノ・ジオヴァネッティは、やっとマスコミの取材攻勢から解放されて、クラブハウスで待つエミリオの元に戻ってきた。

「やれやれ、やっと一段落だ」

さすがに疲れたという表情で、ソファに腰を下ろす。

「お疲れ、ジオ。まあ、しばらくは仕方がないだろうな。なんたって、この競技でオリンピックを連覇した奴は今まで一人もいなかったんだからな。あのマツタレリやスカルゾン達ですらできなかった偉業だ」

ジオヴァネッティは、前回のモスクワ大会に続いて、このロサンゼルス大会でも優勝を果たしたのだ。

「うん、確かにまあ…。形の上では、オリンピック二連覇ということになるけど。実際は

違うからね…」

彼の言いたいことをエミリオはわかっていた。

前回のモスクワ大会では、アメリカや日本などの西側の有力国が政治的な問題で不参加だった。そしてその反動で、このロサンゼルス大会では、今度はソ連や東ドイツなどの東側の有力国が不参加だったのだ。いわゆるボイコットの応酬である。

「ジオ。だからこそ、今回のロスで優勝したことに意義があるんだろう。これで、君は間違いなく真の世界チャンピオンとして、堂々と世界に認知されるんだぞ。ついでに、わが社の銃も同じ評価を受けるということだ。ははは…」

エミリオは満足げに笑った。

だが、ジオヴァネッティの方は、その笑いについては来なかった。

「リッチーニ社の銃が評価を受けるということに関しては、世話になった僕としても嬉しいのには違いない。だけど、真の世界チャンピオンという点については、ちよっと違うよ…」

それは、オリンピック連覇という偉業を成し遂げた直後の男の顔ではなかった。

「たまたま今回、競技に参加している選手の中でトップになったにすぎない。前回はおもかく、今回は、早々と引退してしまった浅尾も出場していなかったし…。それに…」

「おいおい、ジオ。おまえまさか…?」

悲しいかな、エミリオはこの件に関してもジオヴァネッティの言いたいことが、わかりすぎるほどわかってしまっていた。偉業を成し遂げたはずなのに、結局、達成感を感じることができないもどかしさに、ジオベネッティはもがいているのだ。

「慎一郎のことを言っているんだな?」

仕方がなく、エミリオがその男の名を出した。

ジオヴァネッティが、こくりと頷いた。そして、堰を切ったように話し始めた。

「あれだけの才能を持ちながら、慎一郎の奴はそれを一向に世間に公表しようとしなない。そう言いだした彼の話は、止まらなかった。

「今のあいつは、二人の子供の子育てと、観光業に精を出している。たまに銃を持つことがあっても、愛犬と狩猟に興ずる程度だ」

「僕の会社の手伝いもしてはもらっているけどね。一応、義理の弟だしな…」

エミリオは話題を変えようと、口を挟みかけたが、やめることにした。

ジオヴァネッティは、この話を止める気はないようだった。

「だけど、口には出さなくても、僕はあいつがそうしている本当の理由がわかっているんだ。あいつは、したくてそうしているわけじゃない」

今、ジオヴァネッティが言おうとしていることは、三人の間ではずっと触れずにいたことであつた。親友同士の暗黙の了解であつた。この数年間、わかっているけど口に出すことはなかった。だが、彼は今、あえてそれを吐き出そうとしていた。腹をくくったエミリオは、黙って話を続けさせた。

「子育てなんて詭弁だよ。慎一郎は、本当は競技がしたいんだ。クレール射撃が大好きなんだ。だけど、僕や浅尾の立場のことを気遣って競技に関心がないそぶりをしているんだ」

ついに、彼はそれを口に出してしまった。

慎一郎が、フィアンメ・オーロ（内務省所属の国家警察の体育部局）に所属し、国家の

威信を背負っているジオヴァネッティにその榮譽を譲っていることは、周知の事実であった。ジオベネッティが、ポケットから金メダルを取り出した。そして、それを見ながら呟くように言った。

「本来なら、これは銀色のはずだ：」

「よせよ、ジオ。そんなことはないって。あいつは、こういう国を背負うような名誉じみたことに興味がないだけなんだって：」

エミリオのその言葉に、説得力がないことは言った本人が一番よくわかっていた。

その通り、ジオヴァネッティはかまわずに続けた。

「金色のメダルの資格を持つのは、やはり慎一郎だよ」

「おいおい、ジオ。仮にそうだとしても、何も、それをこんな時にこんな場所で言うことはないだろう」

「いいや。こんな時だからこそ、言っているんだ。二度目のオリンピックが終わった今だからこそはっきりと言えるんだよ。やはり、今の僕でも慎一郎の射撃を越えることはできていなかったと：。僕だって、それを認めるのは悔しいさ。前回のモスクワの時は、まだ気持ちに整理をつけることができなかった。あと四年かければ、真の金メダリストにふさわしい人間になれるのではないかと考えて、それなりの努力はしてみたさ。だが、二度目の今回が終わった今、やはり彼を越えることはできなかったと痛感したんだ」

それを聞かされたエミリオには、もうそれを否定する言葉は残っていなかった。

「教えてくれ、エミリオ。慎一郎は、何であんな神がかり的な射撃ができるんだ？」

ジオヴァネッティは、勇気を出して訊いた。

もし、その問いに答えられる人間がいるとしたら、銃製作の天才であるエミリオ以外にはいないと思った。天才は天才を知るからである。

それを受けたエミリオは、世界の頂点にいる男がそのプライドを捨ててまで訊いてきた問いに、きちんと答えてやらなければならないと思った。

「うん、そうだな。まさに神がかり的だな：。マツタレリやスカルゾン、そして君。三人とも、イタリアが誇る世界チャンピオンだ。だが、その三人にすらないものをあいつは持っているんだ」

「それは、いったい？」

「あいつは：、あいつは、銃と会話ができるんだ」

「会話：、が？」

ジオヴァネッティが、聞き直した

「そう。会話ができるんだよ。銃が何かを訴える。勿論、しゃべりはしない。でも、あいつには、それが何なのかを正確に伝わるんだ。感覚でわかるんだ。その感覚は生まれつきの才覚だ。残念ながら、努力では身につかないものだ」

「銃と会話ができる男か：。そんな奴に勝てるわけがないよな」

「まあ、そういうことだ。あいつは、この世で唯一それができる男なんだよ」

ブレシアの中心部の北側の一角に、その洒落た店があった。

バロンと冠したその店は、小さな旅行会社と銃のプロショップを兼業していた。

小粋なサロン風のその店内の一角に置かれたテレビでは、他のブレシアの街中の店や民家と同じように、ロサンゼルス・オリンピックのクレー射撃の表彰式の模様が中継されていた。おそらく、今回のオリンピック中継の中で、このイタリア国内では最も視聴率が高くなっている場面のはずだ。

表彰台の壇上のジオヴァネッティが、金メダルを授与され、会場の観衆に向かって手を振っている。しかし、オリンピック二連覇という大偉業を達成した割には、心なしか嬉しそうには見えなかった。

表彰式の模様が終わると、近衛慎一郎はテレビのスイッチを切った。

彼は目を閉じて、しばらくじっと考えにふけた。三十代に入って蓄えたコールマン風の口髭が、嫌みなくよく似合っていた。

二十分ほど経ってから、おもむろに立ちあがると、店の奥にある自分専用の保管ロッカーから二挺の散弾銃を取り出した。一挺はエミリオ・リッチーニの刻印が施され、もう一挺にはMJの刻印があった。

彼は両方の銃をテーブルに乗せ、手際良く分解すると、布とオイルで丹念に手入れを始めた。

了